
ドットムートの騎士

sularis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドットムートの騎士

【ΖΖΠード】

N4183W

【作者名】

s u l a r i s

【あらすじ】

いつまでも続くと思っていた平和な日々。

しかし、それは突然再開された戦争で終わりを告げる。

少年が妹と見ているその目の前で一人の母は殺された。

それは神話の時代より延々と続いてきた戦争の中での必然だった。

しかし、そんなことは少年には関係なかつた。

母を殺した者。そうするように仕向けた者。そつなるようになした運

命。

その全てを呪い、その全てに復讐^{シテ}することを少年は心に誓つた。

*ストーリー上、妹だの近親相姦キーワードを入れてありますが、作者はその手の場面を書きたいとは思つてませんので、その辺は丁寧に書くつもりはありません。

プロローグ（前書き）

昼寝で見た夢が気になつたので、ぺたぺた肉付けしたら復讐劇になつてしましました。あれ～……？

とつあえず、あんまり長くならない予定です。

プロローグ

俺は復讐者だ。あの時からずっと、そのためだけに生きてきた。

己の全てを、己の大事な物を、その全てを犠牲にして。
人としての心を捨てた。

泣くための涙も切り捨てた。

そして罪を背負った。

考えられる限り、最悪の罪を。
心が残っていても、

その罪の重さに潰れ、壊れ、失われるだけの罪を。

ただ、あいつに復讐するためだけに。
その復讐は間もなく叶う。

だが、その後、俺は間違いなく地獄に墮ちるだろう。
そんなものがあれば、だが。
でも、それが当然なのだ。

そう確信できるだけの事をしてきたのだ。

ただ、虫がいいとは自分でも分かっている。

それでも、願わくば……

俺はセレメンティー王国のグラスティイ公爵家の嫡子として生まれた。先代のグラスティイ公爵は嫡男となる男児に恵まれなかつたため、国王の弟である俺の父親を婿に迎え、後を継がせた。

つまり、俺は国王の甥であり、王子の従兄弟であり、第二位の王位継承権を持つていた。

そんなだから、子供の頃の思い出は、実に貴族らしいものばかりだった。

まだ涼しい朝の時間。

「やあっ！……やあっ！」

縁に囲まれた庭の一角、レンガを敷き詰めた小さなスペース。そこで、僕は刃を丸めた稽古用の模擬剣を、定められた型に沿つて何度も何度も振り下ろす。

「リストスタイル様、そんな振りでは相手に簡単に避けられてしましますぞ。もっと足の運びにも意識を集中させるのです」

隣で見ていた剣の先生 オリバー・男爵 に指摘され、僕は更に剣を振り続ける。

オリバー・男爵は毎年開催される剣術大会で何度も優勝しているほどの剣の使い手だった。そのため、国内の貴族から子供に剣を教えて欲しいという依頼が引きも切らない。

グラスティイ公爵家も彼に依頼した貴族の一人で、そこでの教え子は当然嫡男である僕。6歳になる前からずっと教わっているので、もう、5年以上も彼に剣を教わっていることになる。

そう言えば、前に彼が言つていたが、こんなに長く一人の生徒を見ているのは僕だけだそうだ。

何でも、他の生徒にとつてオリバー男爵の教え方は厳しすぎるらしく、長くても半年くらいでお役御免になつてしまつとか。ただ、それでも我が子を鍛えて欲しいという貴族が後を絶たないのは、「あのオリバー男爵に鍛えて貰つたという箔付けのためでしょ」と本人は苦笑いしていた。

「結構！続いて三の型！」

「はい！」

三の型は真下からすくい上げるよう^に剣を振り上げる。ただそれだけの型だ。

それをひたすら繰り返している僕を見ながら、

「そう言えば、ご存じかも知れませんが……」

とオリバー男爵が口を開いた。もちろん、僕に返事をする余裕がないことは分かっているので、返事なんて待たずに勝手に言葉を続ける。

ちなみに下手に返事をしようものなら、「そんな余裕があるのは真面目に稽古に取り組んでない証拠です！」とこつぴどく叱られるだけだつたりする。

「先日陛下に呼ばれましてな。リストヌル様の従兄弟に当たられま^すアンソニー殿下にも剣をお教えすることになりました」

アンソニーは僕より二つ下の9歳だつ^け。

そつか。やつと剣の稽古も始めるんだ。

でも、それを何で僕の稽古中に言い出すのだ？

その疑問はすぐに解けた。

「リストヌル様の熱心さと剣の腕は既に陛下もよくご存じです。それで、出来ればリストヌル様と一緒に殿下も稽古をさせて欲しいと申されました」

なるほど。それは確かに僕も無関係じやないね。

「そう言つわけですので、明日からリストヌル様には城の方におい

で頂くことになります」

いや、ちょっと待つた。そんな話は聞いてないよ！
つてゆーか、それって前日に言つ事ー？

その動搖を見抜かれたのか、オリバー男爵はよくしなる木の棒で
僕の右肘をピシッと打つた。

「リストヌル様、雑念はよくありませんぞ。剣筋が乱れます」
はい、ごめんなさい。

でも、いつ打たれたのか、全然見えませんでした。
「では、続けてください」

その日の稽古は、それから1時間。たっぷり続いた。

午後の勉強が終わると、やっと自由時間だ。

護衛がいたらはっちゃけることは出来ないけれど、かといって、
護衛無しで屋敷から出ることは許されない。……護衛がいても、基
本的に許して貰えないけど。

ただ、広大な公爵邸には森がすっぽり入るほど広い庭がある。4
つ年下の妹のフイリー や時には使用人の子供達を引き連れて、或い
は遊びに来ていた他の貴族の子供達を引きずり回して、庭で遊ぶの
はとても楽しかった。

「待つてください、リストヌル様～」

へろへろになりながら追いかけてくる使用人の子供達。彼らに捕
まらないように、フイリーの手を引っ張つて、時にはお姫様だつこ
もしながら、庭中を逃げ回る。

俗に言う鬼ごっこだ。僕もフイリー もこの遊びは大好きだった。

ただ、この遊びは使用人の子供相手じゃないと面白くない。貴族
のボンボンは体力がからつきしなので、数分もしないうちにばつて
しまい、鬼ごっこが続かなくなってしまう。

「まあ！またそんな泥だらけになつて！」

東屋への渡り廊下を横切ろうとしたら、たまたまそこを通りがかつたお母様に見つかってしまった。後でまた叱られそうな気もするけど、でも今は後ろから追いかけてきている鬼から逃げるのが先だつた。

「ごめんなさい、お母様！」

「ごめんなさい……」

あんまり誠意がこもつてなかつた氣もするけど、とりあえず謝つて、池の方へと走つて逃げた。手を引いているだけのフィリーも何とかついて来れてるみたいだけど、やっぱりドレスは走りづらそうだった。

「こりゃ、あなたたちまで何してるの！？」

池の縁に辿り着いた僕たちが、次はどしどしひに逃げようかと悩んでいたら、そんな声が聞こえてきた。後ろを振り返ると、追いかけてきてくれていた鬼役の子供達が、お母様の侍女達に捕まつて、お小言をくらしながら連行されていくのが見えた。

「あー、今日の鬼ごっこは終わりかー」

彼らが僕につきあつて走り回つていたことはみんな知つていてるんで、気の抜けた説教を受けながら全身を隅々まで洗われる以上に酷いことはされない。

そのことを知つてゐる僕とフィリーは、ただ、鬼ごっこが終わつてしまつたことを残念に思いながら、池の縁の芝生の上に寝つ転がつた。

「今日も楽しかつたですね、兄様

「うん、明日も遊ぼう！」

僕はそんな楽しい毎日が、ずっと続くと思つてた。
少なくとも、大きくなるまでは。

この世界には神様がいる。

昔々、神様は今よりもっと沢山いて、みんな人間と仲良く暮らしていた。

でも、あるとき神様同士がケンカを始めてしまった。

ほとんどの神様はいつまで経っても終わらないケンカに、辟易して、ケンカのない平和な世界を求めて、この世界から離れていつてしまつた。

残つた神様達は、そのうちケンカの原因も忘れてしまつた。それでもケンカは終わらない。

いつまでも続くケンカはどこまでも悪化していつて、いつの間にか仲良くしていた人間達を巻き込み、利用し、相手を倒すための道具にしてしまつていた。

人間達は神様を中心とした国を作り、争い続けた。

疲れ切つた神様達がケンカを休んでいる間もずつとずつと。

だから、この世界の国々はずつと戦争ばかりしてゐる。

神様と同じで時々休んだりもするけれど、いつまでも、終わらない。

それがこの国で育つた、いや、世界中の人都が子供の時に教えられる神話だ。

ほんとかどうかは知らない。

でも、戦争がずっと続いているのは誰でも知つていた。

ただ、僕たちが生まれ育つた時期が、たまたま戦争が止んでいたというだけだった。

「厄介なことになった」

ある日の夕食の席で、お父様がそうおっしゃつた。それだけで、

お母様は何のことか分かつたらしい。

何のことか分からなかつた僕とフィリーだつたけど、次のお父様の言葉は誤解の仕様がなかつた。

「戦争だ。グラヌス皇国が攻めてきた」

それでもまだ、僕たちには実感がなかつた。戦争なんて、話の中でしか聞いたことがなかつたんだから、仕方ない。

「すぐに貴方も出征されますの？」

お父様が戦いに行かれることが確定しているかのような、お母様の言葉に、

「いや。私はしばらくこちらにどどまり、軍の編成を急ぐことになる。……十年以上も戦つていなかつた分、また長引くだらうな」

そして、お父様は僕を見て、

「明日からお前もついてきなさい。いずれ一軍を預かる者として、軍の雰囲気を机身で感じておいた方が良いだろ？」

「わかりました。よろしくお願ひします」

僕はナイフとフォークを置いて、お父様に頭を下げた。

お父様について、軍の編成や訓練に立ち会つよひになつてから一週間ほど経つたときのこと。

いつものように、練兵場で兵隊さん達の訓練を眺めていると、お父様の部下の一人がやつてきた。その横にはフードで顔を隠した子供を連れている。

「リバース、どうしたんだ？」

恭しく頭を垂れた部下に、お父様が声をかけると、

「実は内密のお話がござります。出来れば人目に付きづらっこ部屋に

……」

その言葉に、お父様はちらりとフードの子供に目をやると、

「わかった。ついてこい」

そう言つて、リバースと呼ばれた部下とその子供を連れて、建物へと向かつた。

僕も後から付いていこうとしたけど、

「リストステル、お前は兵達を見ていてくれ」

そう言われては、付いていくわけには行かない。

「分かりました」

そう答えて、訓練を続けている兵隊さん達を眺め続けることにした。

あの子供のことで何か話をするんだろうけど、何の話なのかちょっと気になる。見たところ、ファイリーと同じくらいの背格好だし、同年代の友達が増えるのかも知れない。そう思つと、ちょっとワクワクした。

やがて、リバースが僕を呼びに来た。

「リストステル様、お父様がお呼びです」

そう言って僕を案内してくれるリバースの横には、さつきの子供はいなかつた。

「さつきの子は？」

気になつていたので訊いてみると、

「それはお父様の方からお話しされると思ひます。私の方からお話しするわけには参りません」

とのこと。

「何でフードを被つっていたの？」

「それも私の方からはお話しできません」

「男の子？女の子？」

「それは……それくらいなら構いませんか。女の子でござります」

大抵の質問ははぐらかされたけど、女の子だということだけは教えて貰えた。

屋敷で一緒に遊んでいた使用人の子供達はほとんど男の子だったので、女の子が増えるのはちょっと嬉しい。

「うちに来るのかな？」

「それはグラスティ公がお決めになることだ」
「やります」

これも答えて貰えなかつた。

すぐに答へは分かるのだろうけど、焦らされてるみたいだつた。

やがて、練兵場にある建物の一つに入ると、2階のある部屋の前でリバースは立ち止まつた。

「ここでお父様がお待ちです。どうぞお入りください」

「リバースは入らないの？」

「リストスティル様のみ入れるよつこと命じられております」

「ということらしい」

ドアをノックすると、すぐに中から、「リストスティルか？なら入れ」とお父様の声が答えた。

ドアの横に立つていたリバースはといふと、僕の視線に軽く頷いただけだつた。

「リストスティル、入ります」

そう言いながら、ゆっくりとドアを開け、室内へと入る。

部屋の中は貴族を迎えることも出来るように、質素ながらも居心地の良い空間になつていて。壁こそ漆喰がむき出しになつてはいたが、汚れ一つ無く、簡素ながらも座り心地に疑いのないソファと縁に心ばかりの飾りが彫りつけられたテーブル。花瓶の類はなかつた物の、部屋の隅には小さな食器棚があり、その中にはティーカップが並んでいた。

難しい顔をしたお父様はソファの一つに腰を下ろしていて、その正面のソファにフードの子供が何故か座つていた。

どう見ても、貴族……それも公爵と一緒に座ることを許される身分を持つていそうにはなかつたけど、実はそつだつたりするんだろうか。

いやいや、それより僕はどうして座ればいいのだろうと思つてゐる
と、

「 いっ ちに座れ 」

とお父様が自分の隣を手で示してくれた。

言われたとおりに僕が座つても、お父様はしばらく動かなかつた。

「 どう説明したものか…… 」

小声でそんなのが聞こえてきた気がするので、お父様の方を見ても、全く気づいてないみたいだ。

視線を移して、正面に座つてゐるフードの（リバースの言葉を信じれば）女の子を見る。

勿論、顔はフードで隠れていて全く見えない。体つきも分かりづらいけど、やつて練兵場で見た感じだと、妹のフィリーに似てると思つ。

ただ、服装はきれいどころか、汚いの一言に尽きる。

ローブ（フードはこれについていた）だけは、リバースが用意したのか模様のない地味なものながらも、汚れのないきれいなものだつたけど、彼女が固まつた拳をその膝に載せているズボンは、黒づんだ汚れがあちこちに付いている上に、何力所も解れて破れてる。やつぱり、貴族とか身分のある家の子供には見えない。

なんで、リバースはこの子を連れてきたんだろう？

そして、お父様も何で一緒に座ることを許してるんだろう？ 屋敷では使用人に、例え低い爵位を持つていても、そんなことは一切許してないのに。

首をかしげていると、お父様がやつと口を開いた。

「 やはり、先に見せてしまつた方が話が楽だな 」

そう独りごちると、僕の方を見て、

「 リスステル、今からそこの子供にフードをとらせる。だが、絶対に驚いてはならんぞ。いいな？ 」

何に驚くのかよく分からぬけど、とりあえず頷いておく。

「 ……まあ、よいか 」

とりあえず頷いただけってことは、あつさりばれたみたいだ。でも、お父様はあまり気にしてない……どうより、諦めてるみたい

だ。

もつとも、その理由を詮索する機会は来なかつた。

「セシル、フードをとりなさい」

お父様に言われ、フードを脱いだその子の顔は……

「フイリー！？！？」

屋敷にいるはずの妹そつくりだつたのだ。

セシルと呼ばれた女の子は、ほんとにフイリーそっくりだった。顔だけじゃなくて、髪の色も瞳の色も何もかも。

「あ、あの、初めてまして……セシルといい……ます」

声はさすがにちょっと違つたけれど、それが分かったのはフイリーの家族だからかもしれない。そう思うくらいには結構似てた。でも、どこの子だらう? フイリーが生まれたとき、だっこさせて貰つた記憶もあるけど、絶対双子じゃなかつた。

そんな僕の疑問を見抜いた訳じやないとと思うけど、お父様が説明してくれた。

「皇国が攻めてきたのは知つているな? その時に国境近くの村が一度占領された。もう奪還したわけだが。

そこに視察に行つたさつきのリバースが、セシルを見つけてな。あまりにフイリーに似ているので、驚いて連れて帰つてきたのだ。
……両親は皇国の兵にな

最後の言葉は、僕にだけ聞こえるように小さな声だつた。

でもとりあえず、事情は分かつた。皇国の兵に両親を殺され、孤児になつていたところをリバースに拾われ、連れてこられたわけだ。そして、皇国に対する怒りがふつふつとわき上がりってきた。今までは話に聞いているだけだったから、実感としてはよく分からなかつたけど、こうして戦争の被害にあつた同年代の子を見ていると、戦争を仕掛けてきた皇国が憎くなつてくる。

「リストル」

お父様に名前を呼ばれて気がつくと、正面でセシルが怯えるように縮こまっていた。

ひょっとしなくても、かなり怖い顔をしてしまつていたみたいだつた。

慌ててセシルに笑いかけてみたけど……ちょっと引きつったかも

知らない。

「それで彼女の遭遇だが……」

何をしてるんだと言わんばかりにため息をついたお父様が再び口を開いた。

聞き逃さないように、背筋をピンと伸ばして（元々伸びていたけど気分の問題だ）、耳を澄ます。

正面のセシルは自分のことだけに、僕なんかより遙かに緊張している。

「うちで引き取らうと思つ

えーと?

すぐには理解できなかつた。

「うちで、引き取る?」

少し遅れてお父様の言葉を繰り返すと、お父様は「そうだ」と頷いた。

うちで引き取る。つまり、セシルがうちに来る、とこいつに来る。

何とか理解した僕が、正面でがちがちに固まつてこいるセシルをちらりと見て、

「それは、使用者としてですか？それとも、養子としてですか？」
普通、平民の子供を公爵家が養子に迎えることなどあり得ない。でも、セシルはあまりにフイリーにそっくりだつた。だから、そんなことを訊いてしまつた。

もつとも、訊くだけ無駄だつたかも知れない。

いくらフイリーに似ていると言つても、平民は平民。貴族は貴族。その一線を越えることをお父様はそう簡単に許したりはしない。
案の定、

「使用者としてだ」

とお父様は言った。

「何にせよ、これだけフイリーに似ているのだ。我が家で引き取る以外にはあるまい」

確かに、公爵家令嬢にここまで似ているとなると、悪事に利用しようと考える輩が現れてもおかしくない。それくらいなら手が届く場所に置いておく方がいいということみたいだ。

「分かりました。……やはりフィリーの側に？」

頷いた後、ふと気になったことがあるので訊いてみる。

「そうだな。折角だし、フィリーと親しくさせるのも良からう」

お父様は、身分の違いさえちゃんとわきまえていれば、相手が誰であろうと、子供達が親しくつきあうのは別に気にしないだけあって、そう返事を返してくれた。

その後、兵隊さん達の訓練が終わるまで、セシルにはさつきの部屋で待つていて貰うことになった。

さすがに一人で置いておくわけにもいかないので、お父様の命令でリバースが一緒に付いていることになった。

そして、屋敷へ帰る馬車の中。

「うーむ……」

お父様はずつと唸っていた。

どうしてなのカリバースに訊いてみたところ、こいつそり小声で、「奥方様に浮気を疑われるのを恐れてらつしやるのでしきう」と返ってきた。

なるほど。あれだけフィリーによく似ているセシルだ。赤の他人と言われるより、フィリーの姉妹だと言わた方がしつくりくる。

あれ？ つてことは、

「リストヌル様。セシル嬢はお父様とは何の関係もございませんぞ」僕は考えをしつかりリバースに見抜かれ、苦笑いするしかなかつた。

まあ、でも、お父様がずっと唸つてる理由はよく分かった。一応証人としてリバースと一緒に来て貰っているけれど、お母様が納

得するかどうか……簡単にはいかない気がする。

当のセシルはといふと、今度はどこに連れて行かれるのかと、僕の隣でまだがちがちに緊張していた。

考えてみると、さつき初めて会ったときも、兵隊さん達の訓練があつたので、結局一言も口をきいてない。

「セシル？」

試しに声をかけてみると、哀れなほどにビクッとして、ぶるぶる震え出す有様だった。

「えつと、大丈夫だよ。ここには君を傷つける人間なんていないから

「ら

優しく、それこそフイリーを慰めるときと同じくらい気を遣つた猫なで声を出す。

それでも緊張が解けないセシルを見て、すぐに返事をして貰えるのは諦め、とりあえず、自己紹介をしてみる。

「僕はリストスティル。リストスティル・ドラッグ・グラスティ。12歳。君は何歳なの？」

勿論、返事はすぐにはない。いつその事無いならぬで、いろいろ話しかけてみるともりだった。けど、

「は、8歳……です」

からうじて返事を貰えた。

でも8歳。やつぱり歳までフイリーと一緒にだ。

なんだか、フイリーと話してゐる気になつてきた僕は、思わずセシルの頭を撫でてしまつた。

「あ……」

何をされるのかといふ緊張でセシルが一瞬ビクッとなつて、僕は「しまつた！」と思つたけど、やつちやつたものは仕方ないし、構わざセシルの頭を撫で続けた。

む。

フイリーとは違つ撫で心地。気持ちよさがある。

ついつい帽子に乗つて、なでなでと続けていると、いつの間にか

セシルの身体のこわばりもすいぶん解けてきたみたいだった。

だからだろうか、

「あ、あの、私、あんまりきれいじゃありませんから……手が汚れてしまします……」

そんなことはないと思つし、いつもはもつと汚れることが多いから、僕は気にはならない。んだけど、さすがにいつまでも撫で続けるわけにも行かないし、渋々セシルの頭から手を放した。

ただ、頭を撫でまくつた甲斐はあつたみたいだ。

目に見えてセシルの緊張が解けた感じがした。

それでも、自分から口を開くほどには打ち解けてはくれなかつたし、完全にリラックスしてくれることはなかつた。屋敷に着いてからどうなるのか、その不安まではなかなか消えなかつたんだと思う。

「つー？あなた！－その子は何ですか！？」

セシルを見たお母様の反応は、やつぱりこいつなつたか、としか言
いようのないものだつた。

馬車の中はどう説明するかあれこれ考えていたお父様だつたけど、
完全にお母様の剣幕に飲まれてしまつてゐる。馬車の中で立ててい
た計画とか予定とか、あれじや全部パーかも知れない。

屋敷の執事もメイド長も、もひとつおまけにリバースも、お母様
のあまりの剣幕のすゝみに目を丸くしてゐるだけで、しばらく役に立
ちそうにはなかつた。

「つきいいいい！」

「浮氣ね！？どこか余所に女を作つてたのね！？」

まあ、お父様は決して潔癖じやない。ほんと、たまーーにだけど、
浮氣もすることがある　　とお母様が言つてゐた。ほんとかどうか
は知らないけれど、時々それでものすゞい夫婦喧嘩　　といふが、
お母様による一方的なお父様への折檻が始まることもあつた。

今も、どこからか取り出した巨大なハリセンを左手に、革の鞭を
右手に持ち……ああ、フィリーの教育上良くないから、せつせと避
難しないと。

フィリーは玄関ホールの一階への階段を上がつたところにいた。
お母様の叫び声を聞いて慌てて飛び出してきたんだろう。その横に
はフィリー付きのメイドのグレイスがあたふたしてゐた。

「セシル、ついておいで」

例に漏れず、お母様に折檻されようとしているお父様の様子を、
目をまん丸にして見つめていたセシルを呼び寄せ、一緒に一階へと
上がる。

「あ、お兄様……？」

僕を見つけたフィリーは、多分、一階で起きてる惨劇に事につい

て訊きたかったんだと思うけど、僕の後ろに付いてきていたセシルを一目見て、軽く言葉を失った。

その隣では、グレイスも目を皿のように見開いて、フイリーとセシルを交互に見比べている。

「フイリー、こちらはセシル。今日からフイリー付きの使用人に加わるんだよ」

そして、セシルにもフイリーを紹介しようと後ろを向くと、セシルもフイリーの顔をまじまじと凝視していた。まあ、話は聞いていても驚いたんだろう。

「セシル。こちらがフイリー。僕の妹だよ。君にはグレイスと一緒に、フイリーの身の回りの世話をして貰うことになる」

二人に互いを紹介し終えたあたりで、やっと3人が動き出した。

「お兄様、それはいいんですけど、セシルさん、というの？ いつたいどこから連れてきたんですか？」

そう詰め寄ってきたフイリーの後ろでは、グレイスが目をきらきら輝かせながら、好奇心一杯にこちらを見ている。

「僕じゃないよ。お父様の部下のリバースという人が連れてきたんだ」

「リバース？ どなたですか？」

「ほら、あの人だよ」

玄関ホールでお母様に折檻され始めているお父様の周りをあたふたしているリバースを指し、「あ、まずいもの見せちゃたかな」と僕が思う間もなく、

「確かにリバース様がおられますね。さあ、お嬢様、ここは冷えますのでお部屋の方に戻りましょう。リストラ様とセシルさんもうぞこちらに」

玄関ホールの様子を一瞬早く見て取ったグレイスが、フイリーの身体をくるっと180度回転させ、部屋の方へと押していくくれた。

ほんと、見事な手際だ。

とりあえず、僕もセシルを連れて、フィリーの臥室へと向かった。

「つまり、皇国の兵に両親を殺されたセシルさんをリバースさんが連れて帰ってきて、それをお父様がお引き取りになられたんですね？」

グレイスにセシルの世話を頼んだ後、僕の説明を聞いたフィリーが小声でそうまとめた。その視線は僕の方じやなくて、グレイスに連れられてセシルが消えていった扉を指していた。

ちなみに、何日もお風呂に入つてなかつたセシルはかなり汚かつたみたいで、僕に世話を任せられたグレイスに、使用人用のお風呂に連行されていった。しばらくは戻つて来ないと思つ。

「それで、わたしに似てるからわたしの側に置くつて……単純すぎませんか？」

気のせいいか、微妙にフィリーの機嫌が悪い。

とりあえず、言い訳を……

「でも、お父様やお母様の側に置くのはイヤだよね？」

これは僕も、お父様やお母様をとられた気持ちになりついでイヤだつたし、フィリーもそれは同じだったみたいで、

「……イヤです」

と素直に頷いてくれた。

「僕の側に置くのは、なんかフィリーに世話して貰つてるみたいで落ち着かないし……」

「…………たし…………ます」

「え？ 何？ 聞こえなかつた」

何かフィリーが言つたような気がしたから、何を言つたのか訊いてみたら、

「それは問題ですねつて言つたんです！」

と顔を真つ赤にして怒られた。

さつきは違うことを言つてた気がするんだけど、そこには触れない方がいい気がしたので、話を続ける。

「だから、ほら、やつぱりフィリーの側に置くしかないとおもつんだ

これで納得して貰えるかなと思つたのだけど……なんか、さつきより機嫌が悪くなつてゐる気がしないでもない。

「フィリー？」

顔色を伺おうとすると、

「分かりました。仕方ないから、それでいいです！」

と怒鳴られた。

それからフィリーの「機嫌を取つて、何とか良くなつてきた頃。

「お嬢様、失礼します。グレイスです」

グレイスが戻ってきた。

フィリーの許可を貰つて入つてきたグレイスの後ろには、スカート姿になつた……セシルだよね？

「さ、セシルも恥ずかしがらずに、リストテル様とフィリー様に見て頂きなさい」

そうグレイスに前に押し出されてきたのは、確かにセシルだつた。まあ、フィリーが横にいるからセシルだと分かるだけで、何も知らなかつたら、使用者の子供の服を着たフィリーと間違うかも知れない。

きれいになつたセシルは思つていた以上にフィリーによく似ていた。

「やつぱり、驚かれました？」

使用者のみんなもすつ「く騒いでましたもの」

それはそうだと思う。

フィリーはしばらく驚きで固まつていたみたいだけど、何とか立ち直るとセシルの所まですたすたと歩いて行つた。

そして、慌ててグレイスの後ろに隠れようとしたセシルの右手を捕まえて、

「あなた、気に入ったわ！ずっと私の側にいなさいーこれは命令です！」

……エセ双子の誕生かも知れなかつた。

一応その後どうなつたかといふと、お父様を思う存分にいたぶり、しばき倒し、痛めつけ、トドメに庭の池に放り込んだお母様がフイリーの部屋に駆け込んで、

「今日からあなたも私の娘です。だから、私のことはお母様とお呼びなさい。いいわね？」

と言つたらしい。

こうして、僕の妹が一人増えたのだった。

少年時代～1（前書き）

そろそろ話が大きく動きます。

思っていたより一話一話が短いので、出来る限り「2話ずつ」連投します。

僕は14歳になっていた。

フランス皇国との戦争が始まつてから、ではなく、再開されてから早2年。皇国による宣戦布告もないきなりの進撃で奪われていた領土をセレメンティー王国が奪い返した後は、戦況はいつも通り硬直し、国境を挟んで一進一退のせめぎ合いが続いていた。

お父様は幾度か国境付近に將軍として赴いてはいたが、ここ数ヶ月は消耗の激しい正面からの激突をお互いが避けていることもあってか、相手の隙を突こうとして放つた遊撃隊をつぶし合っているだけらしい。

僕は正式に軍に入隊していた。ただし、一兵卒からではなく、王家の一員という立場が物を言つたのか、最初から士官として入隊していた。

家の方では、2年前にうちにやつてきたセシルが、あの後すつかり家族と打ち解け、しばしばフイリーと入れ替わるいたずらをしては、お母様や屋敷のみんなを困らせていた。まあ、僕は何となく見分けが付いていたので、一度も彼女たちのいたずらに引っかかったことが無く、あの二人はそれが大層不満だったみたいだけど。

「はじめっ！」

練兵場に響き渡つたその声を合図にして、僕は正面に立っている男へと突つ込んでいった。

互いに武器は剣。ただし、模擬剣だ。あくまでも訓練の一環でしかない立ち合いなのだから。

相手に対し、まずは右から大きく斬りつけ、それは正眼の構えを解いた相手にあっさりと防がれる。

力で劣る僕は剣をはじき返され、姿勢を崩した……わけではなく、これはワザと見せた隙に過ぎない。

14歳の少年では、20歳、30歳といった身体ができるあがつた大人相手に力で敵うはずもなく、真っ向勝負は避けて技と速さで勝負しろ、とは今でも指示しているオリバー男爵の教えである。

剣を弾かれた僕は、その勢いを利用して相手から微妙に距離をとりつつ、ぎりぎりまで身体にねじれをため込み、限界を迎えたところでくるりと一回転。

無論、僕が体勢を崩したと思って追撃してきた相手は、その回転に付いてくることが出来ずに、視界の外から襲いかかってきた模擬剣に頭部を一撃され、あっさり昏倒した。

「勝者！グラスティ殿下！」

審判が僕の勝利を告げ、立ち合いは終了を告げる。

倒れた相手に視線をやると、プロテクターのおかげで大したダメージではなかつたらしく、頭を振りながら起き上がるところだつた。

「隊長、大丈夫ですか？」

駆け寄ってきた兵士に抱き起こされているのは、本日付けで僕の部隊に組み込まれた小隊の隊長である。

つまり、僕の部下ということになるのだけれど、いくら上司とは言え、14歳の子供の命令にほいほい従える訳もない。まして、血筋や爵位故の地位となれば余計に、である。

一応、僕の地位は准将にある。

正式に任じられたのが一年前で、その時は誰もがお飾りだと思っていた。勿論、僕自身もある。

しかし、いつ終わるか分からない戦争は、いつまでもお飾りでいることを許してくれなかつた。今すぐとは言わないまでも、使える

人材になることを求められた。……多分、第一位の王位継承権を持つていたことも関係あるのだろうけど。

兎に角、そういうわけで国王陛下の命により、僕の下に一軍が預けられることとなつた。が、さすがに王族に役に立たない部隊を預けるわけにも行かず、しかし「すぐに実戦に出ないけれど、ある程度使える部隊」などというものは、そう都合良くなは転がつていないわけで。

で、軍の上層部が頭を抱えながらも、負傷者が続出してしばらく使えそうにない部隊とか、訓練中の有望な部隊とかがかき集められたのだが……

さすがに王族の一員に対し、命令無視とかはしないはずだけど、そんな経緯で集められた軍といふこともあり、いまいち統制がしつかりしていない気がした。どうしたものかと、顧問として同行して貰つていたオリバー男爵に相談したところ、「侮られているのでしょうか、ぶちのめせばいいのです」。

それを聞いていた兵士達がいきり立つて、まあ、有耶無耶のうちに集められた小隊や部隊の隊長格の一人と勝負する羽目になつた。

よく考えたら今の状況の元凶の1つは間違いなくオリバー男爵のはずなのだが、睨み付けてもどこ吹く風と言わんばかりに涼しい顔をしている。

で、足音がしたので正面に振り返ると、さつき倒させた相手確か、バンドラックとか言つたか が側に来つていて、膝をついていた。

「殿下、参りました。力量を疑いましたこと、部下達を代表してお詫びいたします」

どうも、その言葉の裏に、気が済まないようだつたら首を切つてください……みたいなのが隠れてるような気がする。

さすがにそれはイヤなので、気づかなかつたことにして、
「バンドラック、立ちたまえ。

いくら准将といえど、私に実戦経験が無いことは事実だ。そのような人間の下で兵士達が安心して戦うことが出来ない」と、少しきつていて。だから、気にする必要はない」

と、出来る限り威儀を取り繕つて、重々しく言つ。

……まあ、ここに見えなければいいのだけれど、と思いながら、更に僕は言葉を続けた。

「むしろ、実戦経験のある隊長格の者達には、私の参謀となつて貰い、いろいろと助けて貰いたいと思っている。当然、君にもだ。いずれ私の軍も、飾りではなく実際の戦場に赴くこともあるだろう。その時、一人でも多くの国民を守り、一人でも多くの兵を生きて帰らせるために、力を貸してくれるな？」

……自分で言つて寒くなつてきた。

まあ、正面に立たせているバンドラックは、僕の演技を見抜いたのかどうか知らないが、とりあえず、これまでよつはづつと素直に「ハツ！」と敬礼をしてくれたので良しとする。

と、夕食を食べながら、昼間にあつたことを話していた。

「それで、お兄様は怪我はなさらなかつたのですか？」

心配そうに訊ねてくるフィリーーに、

「一回も当たられてないのだから、怪我のしようがないよ」

そう言つて、サラダに入つていてトマトをフォークで刺して口に放り……もとい、上品にもぐもぐ食べる。

「はつはつは。さすがはオリバー卿の愛弟子と言われるだけのことはあるな！見事だ！」

と些か下品な笑い声を上げたのは、客人だった。

今日の夕食には、お父様がいない。

軍務で皇国との国境へと出向いているからだ。しばらくなまた帰つてこないだろう。

その代わりに客人が一人いる。今日の夕方にこちらに来て、しばらくこの屋敷に滞在していくらしい。

その客人とは、お母様の弟なので……つまりは僕やフィリーの叔父に当たる人物なのだが、どうにもいけ好かない。これは僕だけではなくて、フィリー やセシルも同意見である（ちなみにセシルは家族だけの時は一緒にテーブルに着くこともあるのだけど、客がいる今日はメイド服で給仕に回っていた）。

白髪交じりの髪といい、無造作に刈られた髪といい、微妙にたるんだ皮膚といい……正直、あのお母様の弟とは思えない。

ただ、久しぶりに弟と会えて喜んでいるお母様の前では、そんなことは言うわけにもいかないし、そんな素振りも見せるわけには行かない。ので、当たり障り無く対応するしかない。

「にしても、折角こちらまで出てきたから、ティアード兄さんにも会つていきたかったのだが、軍務でいなとはな。残念だ」

そう言いながら、叔父はグラスにつがれたワインを水でも飲むかのようにじごくじごくと飲み干してしまう。

「そうね。あの人もブルード、貴方に会えなくて残念がると思うわ」さすがにお母様はそんな乱暴な飲み方はせずに、喉を湿らす程度に口にしていく。

一方で、給仕をしていたメイドの一人が、新しいワインの瓶を開け、空になった叔父のグラスになみなみと注いだ。その際、叔父の手がメイドのおしりの方にのびた気がしたが……さすがに気のせいだと思ったかつた。メイドは明らかに迷惑そうな顔を我慢していた気もするけど。

その後は、姉弟で募る話でもあつたのだろう。

だんだん酒臭くなってきた席から僕たちが逃げ出した後も、ずいぶんと長い間、飲みながらあれこれ話していたらしい。

……当分、夕食はさつさと終わらせるようにした方が良さそうだ。
逃げ出した後、フィリーの部屋でフィリー、セシルとの3人でそう決めた。

その日の天気は、あまり芳しくなかつた。

お父様が帰つてきた翌日のことだつた。

まだ、叔父のブルードは屋敷に滞在していて、昨日は遅くまでお父様と飲み交わしていたようだつた。

そんな日の翌日。

かるうじて雨は降つていなかつたが、遠くの方では雷鳴が鳴り響き、時折地面に落ちる稲妻が見えていた。

「お兄様……」

珍しく軍務も今日は昼まで。午後からは久しぶりに屋敷の自室で読書を嗜んでいた僕の所に、フイリーがやつてきた。

「どうかしたの？」

何か不安げなフイリーの様子が気になつて、そう声をかける。

「お父様とお母様、どこにいらっしゃるか知りませんか？」

……僕の手を取つて見上げてくるフイリーの愛らしさは相当なものだ。こんな風にお願いされたら、絶対に勝てない気がする。ではなく。

「どこにもいないの？」

「はい。用事があつたので探しているのですが、見つからないんです。使用人達にも探して貰つてますが、どこにも」

……それを聞いて僕もイヤな感じがした。

お父様とお母様はこの家の主人だ（僕たちもだけど）。それを使人達が見失うなんて事はあつてはならない。

「マクシミリアンとローディも知らないの？」

「ええ、ご存じないと」

おかしい。マクシミリアンとローディはそれぞれこの家の執事とメイド長だ。下つ端使用人なら兎に角、あの二人がお父様達を見失うなんてあり得ない。

「分かつた。一緒に探そう」

そう言つて僕は本を閉じた。

「ここにもいないね」

「ええ」

本当にお父様もお母様も見つからない。人をやって門番に確認したところ、一人とも外出はしていないみたいだ。庭にも何人かの使用人達が出て探しているけど、やはりいないらしい。

さつきからずつと、フィリーは僕の手を握りしめたまま。

僕もフィリーの手を握り返しながら、つまりは手を繋いだまま、屋敷の中を探し回つてゐる。

お父様の書斎、寝室、図書室、食堂、厨房、地下の倉庫、使用人達の寝室、使われていない部屋……

既に使用人達が見て回つた部屋ばかりだつたけど、僕たちももう一度見て回つた。

どこにもいない。

「あと調べてないのは、客室だけ？」

僕の言葉に、手を繋いだまま付いてきていたフィリーが無言で頷く。

僕もすごくイヤな予感がしてて、不安で仕方ないけど、大丈夫だという顔を保つてゐる。フィリーに心配させないために。

そうして僕たちが客室の前まで行くと、今唯一使われてゐる客室の前にマクシミリアンと他何人かの使用人達が集まつてゐた。その中にはセシルの姿もあつた。

「リストステル様、フイリー様……」

僕たちの姿を見つけ、軽くお辞儀をするみんなに、僕たちも田だけ挨拶をする。

「あと調べてないのはここだけ?」

「はい。ただ、ノックしても返事がないのです。それで合意鍵で入ろうかと悩んでいたのですが……」

主人の親戚に当たる人物に対し、無礼に当たるかも知れないとうことが。

でも、今はそんなことを言つてゐる場合じゃない気がした僕は、即座に決断を下す。

「開けてくれ。無礼は詫びればいい」

「かしこまりました」

既に合意鍵は持つてきていたようで、マクシミリアンは僕の指示に従い、すぐさま客室の鍵を開け、扉を開け放つ。

「誰もいない……?」

「そんなはずはない。」

彼らが屋敷から出て行つたとは聞いてないし、庭でも屋敷の中でも見かけてないのだから、この部屋にいるはずだった。

「…………」

しばしじうするべきか考える。

使用人達はそんな僕の次の指示を待つてゐた。

「…………改めて門番に確認。それから門を封鎖して、庭から順番に風漬しにしろ。いいな?」

「「はい!」」

僕の指示を実行するため、みんな一斉に部屋から飛び出していく。

ただセシルだけが残つていたので、

「セシルも誰かと一緒にお父様達を探しに行つてくれ。……ただ、

一人じゃない方がいいと思うから、絶対に誰かと一緒にいろよ?」

さすがに何かあったときに、フイリーとセシルの二人は同時に守れない。そんなことをちょっとと思いながら出した指示に、

「はい。お一人も気をつけてください」

そう言い残して、セシルも部屋を出て行った。

そして残されたのは僕とフィリーだけ。

無論、この部屋に留まる理由なんてない。明らかに誰もいないのだから。

ただ、部屋を出ようと歩き始めたとき……

「…………？」

冷たい風が一瞬頬を撫でた、気がした。

気のせいかと思ってフィリーを見ると、フィリーも今を感じたらしい。不思議そうな顔をしていた。

しかしそうなると気のせいじゃなかつたつてことになる。

風が当たつた気がするところを何度も往復していると、確かに風の流れが感じられた。

それを辿つていいくと……

「…………？」

客室の石で組まれた柱に注意しなければ分からぬような細い隙間が走つていて。

「ちょっと手を放して。代わりに服の裾を掴んでて」
フィリーに服の裾を握らせ、僕は柱を調べ始めた。
どうやらこの隙間をなぞつていいくと……ちょうど人が一人ほど通れそうな大きさがあるらしい。

「お兄様……」

不安そうな表情でぎゅっと裾を引っ張つてくるフィリーに、
「大丈夫だから。もうちょっと我慢して」
そう頭を撫で、再び柱を調べ始める……どうやらいい、開きやつだ。

隙間の途中に見つけた窪みに指を入れ、ぐいっと引っ張ると案の定、人が二人並んで通れそうな入り口が開いた。

「隠し扉…………ですか？」

「たぶん」

こんなものが自分たちの屋敷にあつたと知らなかつた僕たちは、かなり驚いていた。

しかし、すぐにその驚きは別の驚きに取つて代わられた。

「今の悲鳴は！？」

「……お母様！？」

微かだつたけれど、聞き間違いようのないお母様の声の悲鳴！

僕とフイリーは急いで柱に入り、そこに隠されていた階段を駆け

上つていつた。

「いよいよあれらが来るぞ」

石で出来た牢獄のような薄暗い部屋の中で、灰色のロープをまとつた男が告げた。ロープのフードを深く被つていて、その顔は見えない。

部屋の中央にあるやはり石で出来た台の周囲に立つて居る屈強な体格の二人の男は、何も言わず、身動き一つせずにその言葉を聞いている。

「いやあ！やめて！何で私が！！」

叫びながら一人の女が引きずられるように部屋に連れてこられた。破れた紫のドレスと髪留めが外れ大きく乱れた黒い髪……グラスティ公爵夫人カルデラだつた。

カルデラを連れてきた若い女は、台の上にカルデラを乗せた。台には人を象つた窪みがあり、手首と足首に当たる場所には革のベルトが備え付けられている。窪みの中には幾つもの白い線が走つていた。

カルデラは台の窪みに入れられると、両手両足を革のベルトで縛り付けられ、台に固定された。

「いよいよあれらが来るぞ」

カルデラの様子など目に入らぬかのように、再び灰色のロープの男が告げる。

「いやつ！あなた！あなたああ！！」

部屋の入り口に夫であるグラスティ公ティアードが立つて居るのを見つけたカルデラが叫ぶ。

しかし、催眠術で操られ、心を失つた状態のティアードは、死んだ魚のような目に狂乱する妻の姿を写すだけで、何の反応も見せなかつた。

「いよいよあれらが来るぞ」

三度、ローブの男は告げ、いつの間にか手にしていた、赤い宝石が柄に埋め込まれた金色の短剣を大きく振りかざす。

それが振り下ろされる先を知ったカルデラがよりいっそう暴れ出すぐ、両腕の付け根を台の横に立っていた男達に押さえつけられ、身動きできなくなっていた。

「いよいよあれらが来る。その前に儀式を！力を！」

灰色のローブの男はそう叫ぶと、カルデラの心臓へと短剣を振り下ろした。

両親の姿を求めて走り回っていた僕とフイリーが柱の中の階段を駆け上り、その牢獄のような石の部屋に辿り着いたのは、まさしくその瞬間だった。

狂乱するお母様が台に固定されており、その心臓へとローブの男が短剣を振り下ろした。

その瞬間、ローブのフードがめくれ、お母様の顔が、僕とフイリーの顔が恐怖ではなく驚愕に引きつった。ローブの男は彼女の弟である、叔父ブルードだった。

その時すぐには気づかなかつたが、僕たちが入ってきた部屋の入り口には一人の男が立っていた。死んだ魚のような目にその様子を写しているだけのその男は……お父様だった。しかしお父様は人形のごとく立っているだけで、その凶行を止めようともしていなかつたのだ。

「ははっ……はっはっはっはっ！」

短剣を振り下ろしたブルードが大きく笑い出した。

「あれらが来る！しかし、対する力は今ここに！」

その視線の先、お母様が横たえられていたはずの石の台の上には、いつの間にか心臓を短剣で貫かれたお母様の姿はなく、一振りの金

色の剣が現れていた。その柄には赤い宝石が燐然と輝いていた。

お母様はどこに…?

必死にお母様の姿を探す僕とフイリーの瞳にはしかし、

「これぞ力！ワシが求めし力じゃ！」

その剣を瞳に写し、狂ったように笑うブルードしか写らなかつた。

「素晴らしい！素晴らしいぞ…！」

叫びながら、ブルードはその手に剣をとつた。

「おお、おお！なんと美しい剣なのだ！まさに聖剣…！」

そうして、数度、素振りをして空を切り裂く。その度に、剣の軌跡に光の筋が残つたように見えた。

「くくくくく…！」

あまりにもおぞましい笑い声をたてた後、ブルードは僕たちの隣に立つていたお父様を見ると、

「じつちへ來い」

そう命じた。

あまりに無礼なその命令に、しかしお父様は何も言わず従つた。そして、そのお父様の身体を、光が薙いだ。

「くくくくく…はははははは…！」

ブルードの狂笑に一瞬遅れ、お父様の上半身がずり落ちた。

あまりのことに、僕の理解が追いつかない。隣にいたはずのフイリーは叫ぶ間もなく、目の前で繰り広げられた狂つた惨劇に衝撃を受け、既に気を失つてしまつていた。

噴き出した血を一心に浴び、ますます狂笑し続けるブルード。

しかし、その狂笑が止んだ。

「しかし、足りん。あれらに対するにはまだ足りん…！」

狂笑を止めたブルードは、今気づいたかのように視線を僕たちへと向けてきた。

「ドットムートの血を引く者が要る。我が聖剣の力を増すために…！」

その言葉を合図として、台の左右に控えていた男達（彼らには見

…！」

覚えがあった。叔父の従者として来ていた者達だ）が僕たちを捉えようとして迫る。

そして僕はやっと理解した。叔父が、ブルードが、お母様とお父様を殺したということを！

それと同時に、僕自身が燃え尽きてしまうかのような憎悪が心の中に溢れ出し、僕の理性を押し流してしまってそうになる。

だが、ダメだ。流されではダメだ。

憎悪に身を焦がしながらも、僕は必死に考えていた。このままでは行けない。彼らに捕まれば、僕もフイリーも間違いなく殺される。それだけはダメだ。認められない。

しかし、剣一つ帯びていない僕には戦うという選択肢はなかった。ただでさえ、人数で負けているのに、武器すらないので勝ち目など無い。

やむを得ず部屋から逃げ出そうとするも、いつの間にか僕たちの後ろにはやはり叔父の従者であった若い女が立っていて、逃げ道は塞がれていた。

もうダメだ……！

男達が僕の腕を取つた瞬間だった。

金色の光が、男達を吹き飛ばした。

「何事じや！」

ブルードが叫んだ。

その光の中で僕は見た。

ブルードの手にあつたはずの剣が、僕の目の前に浮いているのを。そして、その瞬間、何者かが僕の頭の中で叫んだ。

聖剣を手に取れと！

その声に従つて、僕はゆっくりと手の前の剣に右手を伸ばし、その柄をしっかりと掴んだ。

それを見たブルードはやつと自分の手から剣が無くなっていることに気がついた。

「……？」

そんなブルードの様子が視界の端に写ってはいたけど、大して気にはならなかつた。

それよりも、僕の手の中に収まつた金色の剣の方が気になつた。手に持つてゐるそれは、本来は僕の手に余る重さがあるはずの大きさがありながら、そんな重さは感じさせない。それどころか、僕の手の中にあることが当然であるかのように、こう、しつくりと馴染んでいた。

「何故じゃ！ 何故お前が持つてゐる！ ？ それはワシの剣じゃ！ ！」狂乱したブルードが剣を奪い取るべく僕に襲いかかるひつとしたとあ、石台の頭に近いところで、光が走つた。

今度は剣ではない。

「ひつ……！」

男達が吹き飛ばされた先ほどの光景を見ていたためか、ブルードは怯えたように大きく後ずさつた。

しかし、ブルードが吹き飛ばされることはなかつた。

代わりに光が現れた場所には、緩やかな布のような衣装をまとつた、美しいブロンドの女性が現れていた。ただ、その纏う空気は冬の嵐よりも冷たく、その纏う威厳は王をも凌ぐ。

見れば分かる。人ではない。

誰にでも分かる。本能が教える。

それは、女神だと。

女神は、ブルードに冷たく告げた。

「お前の役目は終わつたのです」と。

それを聞いたブルードは女神に言い返した。

「まだじゃ！ ドットムートの騎士であるワシの役目は終わつておらん！ 聖剣に比類無き力を与え！」

しかしその言葉は女神によって遮られた。

「お前の役目はドットムートの剣に新たな力を与えること。それは

既に果たされました」

女神は冷ややかな視線で、ブルードを射貫く。その視線で射貫かれた人間がどうなるかは考えたくもなかつたけど、

「あくじつえ　「わん　あ・じ！」

既に意味のある言葉を発することが出来なくなつていてブルードの姿が、その答えを押しつけてきていた。

そして、自分の行為の結果に構うことなく、女神は続ける。

「心弱く歪みし者よ。あなたの裏切りを私が知らなかつたとしても？あなたはあれら、我が敵と戦わねばならなかつたのに、我が敵の脅威に怯え、我が敵が見せる爵位への誘惑に負け、内通者と成り果てました。

その聖剣をも我が敵に差し出し、あまつさえ次なる騎士を害しようとしました」

一つ一つ挙げられていく口の罪状など、狂乱するブルードには最早理解も出来ていなかつた。

「故にこそ、ドットムートの騎士の役目は新たな者に。

そして、役目を終えたあなたはここまでです」

静かに告げた女神は、僕の方へとゆっくり振り返つた。

僕の頭の中で人間としての生存本能が警報を鳴らしまくつたが、それは空振りに終わつた。

「さあ、新たな騎士よ。私の敵にして貴方の敵であるこの者を討つのです」

そう僕に命じた女神は、ブルードを見ていたときと違い、柔らかな笑顔で僕を見ていた。

その言葉を聞き、僕を支配していた恐怖が一気に薄れていつたとき、代わりに僕を支配したのは……憎悪だつた。

女神の言つたとおり、ブルードは僕の敵だつた。

お母様を殺し、お父様を殺し、僕とフイリーまでをも殺そうとした。

僕はフイリーと繋いでいた左手をゆっくりと放すと、改めて剣を

持ち直す。そして、ゆっくつと、狂乱するブルードの下へと歩を進めた。

そして、剣の間合いにブルードを捉え……

憎しみのままに剣を一閃させた。

ブルードがお父様を斬つたときと同じように、剣の軌跡には金色の光が微かに残る。

そして、その光が消えたとき、ブルードの身体は縦に二つに裂かれ、左右へ分かたれ、崩れ落ちた。

「見事です、私の騎士よ」

不思議と返り血を浴びなかつた僕が声の方を向くと、やはり女神が微笑んでいた。

「しかし、まだ終わりではないのです。私と貴方の敵はそれだけではありません」

「どういう事だ？」

叔父を一人斬り殺したくらいでは消えない怒りが、憎悪が、女神の言葉に反応した。

「その者をけしかけた者がいます。それもまた、私達の敵。そして今、その者に味方する者達がこの国に攻めてこようとしています」悲しげな表情で語る女神。しかし、僕の目にはその表情は写つていなかつた。

敵が来る。お父様とお母様を死に追いやつたヤツの仲間が！

再び黒く、不自然なほどに激しく燃え上がる憎悪。

「さあ、私と共に来るので。そして、愚かな私達の敵を討ち滅ぼしましょう」

そう手を差し出した女神は、その手を取つた俺を部屋から連れ出した。

少年時代～3（後書き）

9／8 この後の話に合わせて、後半の内容を大幅修正。

少年時代～4（前書き）

申し訳ないですが、前話が修正されたので、この話を読む前にそちらから読んでください。

はつきりと言つて、それからじばりくは、何が起きたのかよく分かつてない。正確には、覚えてはいるが、意識がぼんやりしていたよつた気がする。

女神に手を引かれて屋敷を出た後、俺は夢遊病者のように王城へと向かつた。王城は何故か蜂の巣を突いたような騒ぎだったが、何事か訊ねる必要はなかつた。俺を見つけた連中から、グランス皇国の軍が王都のすぐ側まで迫つてゐるのが発見されたという事を聞かされたからだ。

ああ、これが女神の言つてゐた敵か。

俺の敵なんだな。

そう、すとんと腑に落ちると、俺はすぐに自らが指揮する兵士達の下へと向かつた。謁見の間がどうとか、將軍達がどうとか、そんなことを言つてゐた連中がいたが、そんなものはどうでもいい。この憎しみのままに、敵を切り刻めばそれでいい。

部下達のところに行くと、部下達も大騒ぎをしてゐた。当然だ。敵が予想も出来なかつたほど近くにいたというのだから、驚かしい方がおかしい。

となると、今の俺はおかしいのか？ おかしいのかも知れない。

……まあ、どうでもいいことだが。

すぐに各隊の隊長を呼びつけ、皇国軍を迎撃つために、出撃する旨を伝える。

部下達が出撃の準備をしている間に、伝令がやつてきて、皇国軍について分かつてゐる限りの情報を置いていった。止めにやつてきたのではなかつたのは、幸いだ。

そして、出撃して、今に至る。

「どうして、あの規模の兵力をみすみすここまで通してしまったの
でしょうか」「確かに。一万もの兵力がここまで氣づかれずに侵入できるとは……」

丘の上に陣取った俺の軍は、王都へと侵攻しつつあった皇国軍の
進路を塞ぐ形になっていた。

お互い、まだ弓などの飛び道具が届く距離でも無し、じつくりと
互いの兵力を踏みしている。まあ、細かい分析は一部の部下の仕
事であつて、他の暇を持て余した（？）部下達は先ほどから緊張感
を和らげるためにか、雑談に興じていたが。

「まさか、他にも侵入している皇国兵がいたりしないだろうな？」「
いるかもしかんなー。あれを今まで発見できなかつたんだぜ？監
視の連中の目はどうにかしてるのぞ」

ちょっと俺から離れたところでは、そんな会話も為されていた。

ただ、どうでもいい会話が大半ではある。

どうやって敵がここまで来たのかなんて問題は、参謀本部にでも
任せたければいい。俺たちが考えるべきは、敵をどう躊躇するかだ
けだ。

ここに来るまでの間に、多少の冷静さを取り戻した俺は、そう考
えていた。冷静さを取り戻していなかつたら、何も考えずに全軍突
撃させていただろう。

……それもありなのだが。

「援軍は？」

馬に乗つたまま側に控えている参謀に問うと、

「編成にしばらく時間がかかるそうです。なにぶん、グラスティ公
がまだ見つからぬいため、手間取つてゐるとか……」

王都との間に伝令を大量に行き来させて、最新の情報の把握に躍
起になつてゐる参謀は、そう答えた。その視線は、グラスティ公
つまりお父様について聞きたそうだった。

教えてやるかどうか、しばし考え……

「我が父は暗殺者の凶刃に倒れた。既にこの世にはおられない」と教えてやつた。あれが暗殺だったかどうかは怪しいが、似たようなものだらう。

ただ、お父様のことを話したことで、怒りと憎しみがまたうめき始めている。

「な……」

絶句している参謀が余計なことを言つ前に、「父がいないと援軍が編成できなこと」いうなら、援軍無しで戦うことになるんだな?」

「あ、は、はい。そうなりますが、それでは必ずしも勝てるとは……」

さすがに目の前の戦闘のことを持ち出されると、サッと思考が切り替えられるあたり、それなりに優秀だ。

「敵軍はおよそ1万。それに対して我が軍は半分程度の6千。数の上では圧倒的に不利です。ただし、相手はここまで進軍でそれなりの疲労をためていると思われますので、数の差はそこまで大きく考慮せずとも良いでしょ。

また、相手はこちらに援軍が来る可能性を考慮して動かねばならず、それにより戦術が制限されるはずです」

参謀がつらつらと並べ立てた状況の分析結果を一通り聞いた後、お父様のことを話して再び怒りと憎しみに支配されつづいた俺は気になつていていた2つの事を確認した。

「敵の頭を潰せば、皇国軍はどうなる?」

「まあ、当然士気はがた落ち、一いつ切の戦力が激減でもしていない限り、あつという間に降伏するでしょ」

「では、敵軍の将軍はどの辺にいるか分かるか?」

「……殿下、何を考えておいでで?」

怪訝そうな顔になつた参謀の質問は無視し、改めて問い合わせる。

「敵の将軍はどの辺にいるのかと訊いている」

「……余程自分の力に自信があるのでしょうな」

そう言つて参謀が指した先は、事もあるうに敵軍の最前列だつた。特に目立つ目印などはないが、そこにいるというなら、確かに余程自信がない限りは無理だ。ちょっとやそっと腕が立つくらいでは、押し寄せる無数の敵兵相手に、たまたまやられてしまいかねない。だが、それは俺にとつては好都合だつた。

確かに敵は憎い。だが、下つ端の兵士はさすがにブルードのことなど知りもしないだろうし、関係もないだろう。そんな連中まで皆殺しにするつもりは無かつた。そもそも、人一人の体力で1万もの軍を殲滅することは不可能なのだから、殺しても大して気が晴れない下つ端など放つておくに限る。

ただ少なくとも、敵軍の頭を殺す役割を誰かに任せたつもりはなかつたし、お父様達を死なせた黒幕とやらを殺すまでは、こんなところで死ぬ気もない。

ならばどうするか。

簡単だ。

俺が先陣を切つてさつさと敵の頭を殺せばいい。

敵の大将は相当腕に自信があるようだが、そんなものは聖剣の前では何の意味もなさない確信があつた。ならばそうしよう。

「全軍に伝達。三角陣形で突撃。敵の将軍を討ち取り、一気に降伏させる。降伏しなかつた場合は、そのまま敵軍の殲滅を行う」

「殿下、それは作戦でも何でもありません！ただの無謀な……！」

反対を唱えてきた参謀の喉元に聖剣を突きつけ、黙らせる。

「問題ない。俺が敵将軍を殺せば済むことだ」

冷ややかにそう言い放ち、剣を腰に戻す。

「そもそも、この軍はまだ寄せ集めだろう？数日前に集められたばかりの軍に、複雑な作戦などこなせるものか。

それに万が一俺が討たれるようなことがあっても、三角陣形なら軍のほとんどが交戦に入る前に撤退も出来るはずだ。問題は無いだ

ろつ?」「

「た、確かに殿下のおつしゃるとおりかも知れませんが、それでは殿^{てん}下^げ自身の安全が!」

保身のためか何か知らないが、剣を突きつけてきた知り合つて僅か数日の相手の安全を考えるとは、ずいぶん真面目な参謀だ。さすがに苦笑し、

「なら、俺が敵の頭を潰すまでの間、俺を守る護衛役でもつけることだな。必要ないと思うがな」

参謀もそれ以上はこちらが譲歩しないと思ったのだろうか、その譲歩だけでもマシだと思ったのだろうか。

「本来なら、援軍がついてから動くべきなのですが……やむを得ますまい」

剣を突きつけられた時点でこちらの本気が分かつていたというのもあるだろうが、ぶつぶつ言いながら俺の案を受け入れることにしたようだ。

すぐさま何人かの伝令を走らせ、軍に参加している騎士団の中から腕に覚えのある騎士達をかき集め、口を酸っぱくして俺を死なせないようなど厳命する。

「じゃ、行くとするか」

まだ、俺の決定に半信半疑な周りを黙らせるために、再び腰に下げていた聖剣をとり、今度は大きく頭上に掲げる。

金色の刀身といい、柄頭に埋め込まれた赤い宝石といい、全体を覆う緻密に掘られた文様といい、一見装飾剣にしか見えないそれは、女神曰く正当な使い手である俺の意思を受けて、ほんのり光つている。

一瞬、ただそれの美しさに目を囚われた騎士達は、しかしごろにその光に気づき、ざわめき始める。

「まさか、魔剣か?」

「ただの装飾剣じゃなかつたのか……」

「殿下の自信はあれだつたのか」

「あれなら行けるか？」

「行けるかも知れない」

半信半疑だつた騎士達が、行けるかも知れない、から、絶対に行けると確信するまでさほど時間はかからなかつた。

魔剣はそれほどまでに貴重で、そして強力な代物なのだ。

兎に角、周囲の騎士達や部下達の雰囲気も良くなると、そこから士気の高さが伝播し、僅かな時間で全軍がその気になつてきた。

気分の問題で聖剣を掲げただけなのに、思つても見なかつた効果が得られたが、これで周りの雑魚を気にしなくて良くなつたというなら、万々歳だ。

「全軍、突撃！」

叫ぶやいなや、乗つっていた馬の腹を蹴り、俺は敵陣へと駆けだした。

「殿下に続けーーー！」

後ろでもそんな声が次々と上がり、軍が動き出す轟きが鳴り響く。正面の丘の上でも、こちらの動きに気づいていたのか、皇國軍が動き始めていた。

その正面中央、参謀が敵将がいると指摘した場所めがけて、馬を走らせる。

数百メートルしか離れていなかつた双方の間の距離は瞬く間に無くなつていき、俺は敵軍の中に飛び込んだ。

さすがにいきなり敵将とは戦わせてくれない。

敵将と思しきミスリル銀製の立派な鎧を着た相手を目に捉えたはいいが、すぐさまその左右から無数の騎馬が湧いて出て、俺の進路を塞ごうとする。

無論、無駄でしかない。いや、俺の感情を逆撫でするだけ逆効果といつヤツか。

殺すべき相手の姿を確認しながらも、敵兵に邪魔をされ、憎悪よりも怒りが大きく膨れ上がる。

その怒りにまかせて突き出されてくる槍を途中からぶつた切り、

すれ違いざまに相手の胴を薙ぐと、鎧もろとも手応えすらなく相手が真つ二つになつた。

異常なまでの切れ味に驚きながらも、満足し、次の相手を受ける盾ごと切り裂く。

その防具が一切役に立たないこちらの攻撃に、明らかに敵の騎馬がひるんだ。

そのひるんだ敵の間を、馬を駆つて一気にすり抜ける。

無論、ひるみながらも突き出される槍や剣は無視できない。実際、俺が乗つていた馬の首にも剣や槍が突き立てられ……その直前に馬から飛び降りていなければ、どうと倒れ伏した馬の巻き添えになつていただろう。

「殿下！！」

後ろから聞こえてくる護衛の騎士達の声が遠い。敵に阻まれて、距離が空いてしまつたのか。

ただ、その声を聞いた敵の反応が変わつた。

「殿下？」

「殿下だとー？」

何も考えずに突撃してきた若造がやたら強く手を出しづらかつたから、首を取れば大手柄！といった具合だ。

一瞬、後退して護衛と合流するべきかとも考えたが、既にそちらの道は塞がれ、破ろうとすると他から手痛い攻撃を受けそうな状況だつた。

まあ、元々敵将の首が目当てなのだ。退く必要など無い。

周りから突き出された剣も槍も相手の腕ごとまとめて切り落とし、俺は敵将へ向かつて駆けだした。

敵将も既に剣を構え、俺が来るのを待つていてる。

持つていた盾を捨てるのはさつき見た。

俺が盾も鎧も何もかもまとめて斬り飛ばすのを見ていたのだろう。役に立たないと判断して捨てて身軽になる方を選んだということか。これ以上の部下の損耗を抑えるためか、周りの兵士達に手出しを

しないように命じると、こちらへ向かつて突撃してきた。

それでも、こちらの方が有利だ。

オリバー男爵から指南されている剣術は、スピード重視のものだ。加えて俺の力では重たい防具など装備すると、動きが極端に鈍るため、俺が装備している防具はせいぜいガントレットだけと言つてい。迂闊に攻撃を食らえば、致命傷になりかねない。

だが、それは相手も同じ事。聖剣は鎧など紙切れ同然に切り裂いてしまうから、相手もこちらの攻撃を食らえばそれで終わりだ。それどころか、相手は俺の剣を受けるわけには行かない。剣で受けければ剣ごと切れる。

だからだろう、相手はあと少しという距離で大きく右に逸れた。俺も立ち止まり、敵将に背中を見せないようにその場で向きを変え、敵将の背を追いかけようとして……思ひとどまつた。

周囲は全て敵兵だ。特定の敵を追い回すなど、背中から攻撃してくれと言つようなものだ。案の定、怪しい動きをしていた騎士も一人や二人じゃない。

逃がすつもりはないが、自分が死んでは元も子もない。

俺に逃げられて困るのは相手も同じだろうから、どこへ行つても追いかけてくるだろう。

ならばと、敵将と反対側へ駆けだし、その辺にいた雑魚を問答無用で切り払う。様子見とまでは行かないものの、まさかこっちに来るのは思つていなかつた敵兵は軽い混乱状態に陥つた。

「貴様ああ！！」

怒号を上げて後ろから襲いかかつてくる敵将。

まともに相手をするには、まだ周囲に敵が多すぎる……などと言つてはいるが、終わらないか。どうせ、次から次へと敵兵は湧いて出るのだ。

とりあえず、横にいた騎士の両手を切り飛ばし、その後ろに隠れてみる。

「くつ……！」

部下には甘いのか、まだ絶命していない騎士を盾にした俺を前に敵将は足踏みした。

だからといって、手加減する気はない。

そもそも、呑気にしていたらいつ後ろから槍で突き刺されるか分かつたものではない。

盾にしていた騎士を、敵将の方へと思い切り蹴り飛ばし、その背に隠れて一気に距離を縮める。

そして、騎士の身体ごと敵将を貫こうとして……手応えがない。

「がふあっ……！」

叫んだ騎士の身体から剣を抜くのももどかしく、そのまま横へと振つて敵将の剣を斬ろうとして、

「！？」

剣の腹を叩かれ、軌道を逸らされてしまった。自信を持っているだけあって、相当な剣の腕前だ。

確かにそれなら剣を斬られることはないな、と感心しながら、即座に後方へ飛び退く。

すぐ目の前に突き出されてきた剣を見ながら、弾かれていた剣を引き寄せ、敵将の剣を斬ろうとする。が、すぐに引き戻され、間に合わなかつた。

どうやら、小手先の技は効かないと考えた方が良さそうだ。

かといって、こちらが追いかけたら、さつさと逃げるため、どうにも攻撃しづらい。今この場においても、戦場全体でも数の上ではあちらが有利なだけに、敵将としては俺を引きつけておくだけでいいのだから、まともに打ち合ひう気がないらしい。

ならば、早めに仕留めに来ざるを得ないよつにするしかない。

前に出ると見せかけて、後ろに退く。

そして、再び周囲を囲んでいた騎士や兵士を切り捨てる。

「くそつー！」

案の定、慌てて襲いかかってくる敵将。しかし、俺が向き直ると

その場に止まつた。いや、止まらざるを得ないか。

あっちから仕掛けてきても、その剣を切り落とされたらアウトである。正面から向かい合つた場合、敵将に出来るのは、俺の攻撃をいなしつつ逃げ回ることだけ。

ただ、実際にじり貧なのは俺の方だ。

相手は時間さえ稼げば、数の差でどうにでもなるのだから。仕方なく、今度は本気で前に出て斬りつけてみる。ただし、剣の腹を叩かれることを前提に、大きく剣を振ることはしない。

敵将も迂闊に剣を弾こうとはせず、今度は素直に下がる。後ろ向きに。そこには、俺の攻撃を防ぐための盾があった。

それを見て俺は、前に出る速さを上げた。後ろ向きに進むよりは、前に進む方が速い。なら、距離を詰めることが出来るかも知れない。

まあ、甘かった。

上官のピンチと見て取つた周りの騎士や兵士が、動きを見せようとして……

「殿下！ ご無事ですか！？」

俺の軍が乱入してきた。

元々、すぐそこまで来ていたのを敵兵に阻まれていただけなのだ。これによつて、状況は一気に変わつた。

周りの兵を気にしなくて良くなつた俺は、剣の腹を叩きに来ることを前提の突きや小振りな斬撃を放ちながら、一気に敵将との距離を詰める。

さすがに躊しきれなくなつた敵将が、思わず俺の剣をはじきに来た瞬間。

剣をくるりと回して、敵将の剣を半ばから切り落とした。

敵将の目に、後悔と恐怖の色が浮かび、次の瞬間、その首は宙に舞つていた。

敵将の首を落とした後は、もう俺にやることはなかつた。

一気に総崩れになる皇國軍を、数に劣る俺の軍が一気に攻め立て、彼らが降伏するまでにさほど時間はかからなかつた。

敵軍を武装解除させながら伝令を飛ばし、王城からの指示を待つ間、思いもかけない大勝利に沸いていた部下達が俺に向ける視線は、不信感から強者に向ける敬意へと変わつっていた。……多少、不信感、警戒感が残つているのは否めないが。

王城から急遽出向いてきた元帥に後始末を任せ、屋敷に戻つた俺は、服を脱ぎ捨て、身体についた返り血を洗うと、あの部屋へと戻つた。

既にその部屋からは、屋敷に帰つてすぐにマクシミリアンから聞いていたとおり、お父様の遺体も、叔父の従者共の死体も運び出され、きれいに片付けられていた。

「お母様は？」

後ろに控えていたマクシミリアンに訊いたが、

「ご遺体は見つかっておりません」

……やはり、この剣がそうなのだろうか。

迂闊にそんなものを振り回して、敵を斬るのに使つてしまつたことに、今更ながら多少、後悔の念が湧く。

その後、お父様の遺体が安置された小部屋に向かつた。

「フイリーとセシルは？」

「お嬢様は寝室でお眠りになつています。セシルもご一緒しています」

歩きながらの問いにかけに、マクシミリアンはそう答えた。

臨時の靈安室となつた小部屋の前に着くと、お悔やみを言いに来ていた貴族達が、一斉に頭を下してきた。彼らの心の中を考えると、あまりいい気はしないが、「樂にしていて下さー」とだけ告げ、靈安室へと入る。

明かりを制限されたその部屋の中央に置かれた台。その上にお父様は静かに横たえられていた。

ただ、2つにされた身体では、両手を胸の上で組むことも難しかつたようだ。それどころか、身体が離れてしまわないようこてに支えずらしてある。

服は……殺されたときのままだつた。その服のみならず、台までも血まみれなのは、仕方ないのだろう。

ただ、輪切りにされた身体から内臓がはみ出でていらないだけマシだつた。

血臭漂つ部屋の中、お父様の顔を見ていると、びつひとつこんな事に…という思いと、絶対に許さない…という憎しみがふつふつと湧き上がつてくる。今後、一度とこれらの人間から解放されることはないのだろう。そう思える。

「お父様、どうか安らかに」

短い黙祷を捧げ、俺は部屋を出た。

少し眠たい。食事はいいから少し眠りたかった。

自分の寝室で田が覚めた後も、しばらくの間ぼーとしていた。外は既に暗い。帰ってきたときはまだ夕方に遠かつたから、少し眠るだけのつもりが、思ったより長く寝ていたということか。

喉の渇きを覚えた俺は、軽く頭を振つてベッドから降りると、部屋の中央へと向かつた。テーブルの上には水が一杯に入れられたキヤツチャヤーが用意されており、それからグラスに水を注ぐと、一気に飲み干した。

ベッドに腰掛け、あの部屋での出来事を思い出す。

何故、お父様とお母様は殺されなければならなかつたのか……いや、お父様は単なる巻き添えに見えた。聖剣の試し切りに使われたのだ。

そう考へてしまい、湧き上がつてくる憎悪を何とかして抑えなくてはならなくなつた。

そこで、考えを続ける。

何故、ブルードは姉であるお母様を殺したのか。

……分からぬ。

鍵になりそなのは、

ドットマー一。

聖剣。

女神。

女神を除けば、聞いたことも見たこともないものばかりだ。ただ、女神ですら神話の中の存在でしかなかつた。

「くそつ！」

考へても分からぬ苛立ちを、拳に込めて叩き付けるが、ベッドのマットではぼふつといつ音がするだけだった。

「知りたいですか？」

その声が聞こえてきたのはその時だった。

思わず飛び起きた俺の目に、テラスに続く窓際に立つその影が飛び込んできた。

緩やかな布のような衣装を纏つた女性の影。
そしてさつきの声。

「女神……？」

そう呟いた俺に、

「セラステイアと呼んでくれて構いませんよ」

そう言つと、女神は窓際を離れ、俺の方へと歩み寄つてきた。

「それよりも、知りたいのでしょうか？」

何故、貴方の両親が殺されたのか。

ドットムートとは、聖剣とは何なのかを」

テーブルの横で立ち止まつた女神は、艶然と微笑んだ。

「……教えてくれるのか？」

突如として現れ、疑問に答えてくれるというその話はあまりに都合が良かつた。

だが、俺は知りたい。

知つて納得できる話じゃない。それでも知りたい。

そこに理由はなかつた。

そう熱望する俺の心を読んだわけでもないだろう。顔に出ていた

だらうから。

だからか、女神はクスリと今度は無邪気に笑うと、

「いいでしょ。

聖剣とは何か。ドットムートとは何か。

全て教えて上げましょう

女神の話は驚きの連続だつた。

神話の通り、神々は古から今に至るまで、延々と争い続けているのだそうだ。最も、セラスティアと名乗つた女神のように、終わりのない争いに膾んだ神々もいるが、一部の神々はまだ争いを続けようとしているし、神々に味方した人間達もまた、理由を忘れ争い続けている。

それが今の戦争の原因。

そして聖剣とは、神が神を殺すために生み出した武器なのだそうだ。ただ、聖剣がその力を發揮するためには、生贊が必要だつた。それがドットムートの守人と呼ばれる一族。

ドットムートの人間の魂と肉体を喰らい、聖剣は自らの刃と為す。それによつて、神を殺すだけの力を得る、聖剣と呼ぶにはあまりにも禍々しいその性質。

そのため、神々が直接争つていた時代にドットムートの守人は次々と生贊に捧げられ、ほとんど滅んでしまつた。

だが、僅かに残っていたのがお母様とその弟、ブルード。セラステイアの保護下にあつたはずの二人だつたが、ブルードは隣国にいるという別の神に唆され、姉を聖剣に生贊として捧げたのだという。

「そんなことのために……殺されたって言つのか！？」

激怒し、俺は思わず女神に詰め寄つていた。

そんな俺の様を慈愛に満ちあふれた眼差しで見つめ、女神は、「そうです。私はそのことに気づくのが遅れ、カルデラを助けられませんでした」

と、目を伏せた。

さすがにバツが悪くなつて、

「あ、いえ。お気になさらないでください」

そう、女神の横に俺は立ち去つた。

「そう言つて貰えると、嬉しいです」

再び艶然と微笑む女神。

その笑顔の中の瞳に、一瞬何とも言えない光が浮かんだかと思つと、俺はこの場で感じるのはふさわしくない感情を感じた。

「あの、何を……？」

俺に手を取られ、首をかしげる女神。

その様子を目に留しながら、おかしいと俺の理性は告げている。この感情……いや、欲望がどういうものかは知つてゐる。14歳にもなつて、知らない方がおかしい。ここまでそれが刺激されるような要因はなかつた。それどころか、憎悪と驚愕に飲まれ、他の感情などとともに機能していられないはずだつた。

しかし、俺の身体は手を引いて、女神を抱き寄せる。

左手を女神の腰に巻き付け、動搖する女神の唇を一気に奪つた。

「ん……ん……ふ……う……」

唇が離れると、真っ赤に赤面した女神の息は乱れ、

「あの、何を……」

弱々しく俺の身体を引きはがそうとする。

だが、最早理性など欠片も残つていなかつた俺はそんなことは構わず、女神をベッドへと押し倒していく。

少年時代～5（後書き）

これで少年時代編終了です。最後はまあ……あれくらいなら大丈夫だと信じたい。

「縁談、か」

グラスティ公爵家の執務室で、俺は一枚の手紙を手に、悩んでいた。

手紙の内容が問題である。

『フイリー公爵家令嬢を妻に迎えたい』

要約すれば、その一言に尽きる。

差出人はカリオス公国グラカード・エム・カリオス王子様である。

カリオス公国は早くに神を失った人々によつて作られた国だ。そのせいか、神々の争いからは距離を置いていた。それは同時に、神々の代理戦争からも距離を置くことにつながり、結果、周囲の国と戦争状態にない珍しい国家として知られていた。

無論、セレメンティイ王国とも友好的な関係を築いており、両国の貴族階級もちょくちょく互いを行き来している。

さて、手紙に寄れば、グラカード王子はこの間城で開かれていた舞踏会に参加しており、そこでフイリーを見始めたとのこと。

……大問題である。

いや、美しい姫が隣国の王子に見初められてというのは、普通ならラブロマンス系の王道パターンなのだろうが……

……繰り返す。大問題である。

何しろ、あの舞踏会当日は、フイリーは体調を崩して寝込んでいたのだ。

つまり、フイリーは舞踏会には出席していない。

何度も見舞いに行つた挙げ句、侍女達に「邪魔です」と追い払われた俺が言つのだから間違いない。

しかし、フイリーは舞踏会に参加したことになつていて、どういう事か。

……セシルが代わりに行つたからなんだよな。

14歳になつたフイリーとセシルは、相変わらず見た目では区別がつかないほどにそつくりだった。フイリーの兄である俺ですら、油断すると間違いかねない。ただ、話をしてみればすぐにどちらか区別がつけられるのだが。

とにかく、件の舞踏会には、セシルが代わりに行つてきたのだ。セシルから詳しい話を聞いていなかつたが、グラカード王子はフイリーの身代わりで舞踏会に参加したセシルを見初めたと言つことになる。

これがセレメンティイの貴族や王族相手ならどうとでも誤魔化せたし、最悪全部をぶちまけてごめんなさいで済むのだが……さすがに隣国の友好国の王子相手となると……

せめて、セシルが立派な貴族だつたら事実を打ち明ける手もあつたのだが、血筋は見事な平民だ。それも無理。

「うーむ」

……まあ、悩んだところですぐに答えが出るようなものではない。幸い、グラカード王子もそこまでがつついてはいないのか、返事をするまで多少の猶予がある。

俺は手紙を引き出しにしまい、問題を先送りすることに決定した。

何しろ、公爵としてやらねばならない仕事が山のようにある。領地の管理に加えて、配下の軍の面倒も見なくてはならないし、今いる屋敷の使用者の働き具合もチェックしなくてはならない。気の置けない部下にも苦労して貢つてているが……非常に大変だ。今更ながら、こんな大変なことをきつちりこなしていた父に敬服する。

ちなみに、学校の類には最早行っていない。フイリーは貴族学校に行っているのだが、学校になど行っていたら公爵としての仕事が全く出来なくなる俺は、代わりに家庭教師を雇つて勉強を教えて貢つていい。ついでにセシルも勉強させ、最低限の教養は身につけて貢つている。

「さて、今日の書類は……と」

机の上に山と積まれた書類から、俺の承認を待つていいだけの案件を取り出し、問題ないとthoughtたものには片つ端からサインしていく。

手元の紅茶が切れるごとに、ベルを鳴らしてマクシミリアンに新しい紅茶を入れさせる。ついでに目を通した書類を押しつけ、或いは不明な点がある案件については説明のために責任者を呼び出させる。

「さつぱり終わりそうにないんだが……おかしくないか？」

紅茶を入れてくれているマクシミリアンに訊ねると、「慣れでしょ。慣れれば、どうでもいい案件にはさっさと見切りをつけられるようになるそうですから、ずいぶんはかどるようになると思いますよ」とのこと。

確かに、机の上に山と積まれている案件のうち、半分以上はどいつもいいものだつた。公爵家に仕える人間には、自分で判断を下せない輩が少なからずいるらしい。

「役に立たない連中は、首にするか給料減らすか。何のために雇つているのか分からぬのでは困るし」

「そうほやくと、書類の山を整理していったマクシミリアンは、ムチだけではいけません。役立たずには罰を貰えるなり、役に立つた者には報酬を貰えなくては、士気が下がるだけです」

一理ある。

確かに、罰を貰えるだけでは人間、やる気とか士気とかが下がるのさ軍で確認済みだ。

「……まあ、その辺の差配はマクシミコアン。お前に任せる
「かしこまりました」

午後の公爵としての仕事が終わると、軽く食事をとつて、一人で王立図書館へと向かう。無論、変装は欠かせない。曲がりなりにも王位継承権を持つ身だ。どこで誰に命を狙われているか分かつたものではない。

にもかかわらず図書館へ通うのは、天気が悪い日や夜からどこかの貴族の家での宴なんかに招待されている日を除けば、3年くらい前から日課と言つていいくらいに続いている。

王立図書館は王都の真ん中にある王宮……そこから少し南東に行つたところに建てられている。下手な貴族の屋敷などより遙かに広く、巨大で、莊厳な石造りの建物だ。一説には王宮と同じ時期に建てられたという話もあるが、真相は誰にも分からなくなっている。ただ1つ、上位の王位継承権を持つ者にだけ教えられている秘密があつて、王宮からの抜け道の出口の1つが、この図書館には隠されている。無論、誰もそんなことは知らないし、今まで使われたこともないのだが。

最早顔バスになつた入り口を通過し、図書館の奥、おどぎ話や神話の類の書物が收められている一画へと向かう。文字を読むには苦労しないが、明るいとは言い難い程度の明かりしかないその一画は、実に怪しげな、平たく言えば、光が届かない隅の方から学者の幽靈でも出てきそうな雰囲気がある。

日によつては、各国の歴史について書かれた書籍を漁ることもあるが、今日は神話を漁る。この辺は気分の問題だ。

「ふむ、これはまだ目を通してないな」

古ぼけた一冊を棚から取り出し、近くの机に腰を落ち着ける。人が来たことを感知して、机の上に置かれていたランタンの魔法の明かりが少しばかり強くなった。

「紙の状態は……悪くないな」

持ってきた本の拍子を、続いて最初の数ページを開いて紙の状態を確認する。

酷いときは、棚から取り出した時点でページがばらばらになってしまったり、紙と紙が張り付いていたり、虫に食われて文字もクソもなくなつていたりする。

それを考えると、今日の本は状態はいい。これなら、読むのも苦労しないだろう。

ちなみに、今日の本は神話だが、神話と言つても昔は神々が腐るほどいただけあって、神話も腐るほどある。あの神を主人公にしてもたり、この神を主人公にしてみたり。で、主役が変われば、書いてあることが変わったり、客観的には同じ事のはずなのに、解釈が全く違つたりで、バリエーションも非常に豊かだ。……小説の類を読んでるわけじゃないはずなんだが。

「……外れっぽいな」

3割ほども目を通した後、俺はそう判断した。この神話は目的とする情報は載つていない。

そもそも、俺が神話だの歴史だのを調べている理由は、俺の両親が死ななくてはいけない状況を作り上げた者が何者なのか、知るためだ。

なんでドットムートの聖剣なんものが存在するのか。
ドットムートの聖剣を作ったのはどの神なのか。

叔父を唆したのは何者なのか。

分からなくては、この憎しみのやり場がない。

あれから4年が経つたが、憎しみは消えることも減衰することもなく、俺の心の中で暗い炎を燃やし続けている。

幸い、小さい頃からの顔なじみに囲まれている日常では、生活に差し障りが出るような事態には至っていない。だが、相手が分からぬ状態では、いつ知らない相手にこの憎しみをぶつけてしまうか分かつたものではない。

……学校に行けない理由は実は忙しいからだけではないのだ。

ちなみに、護衛をつけない理由も似たようなものだ。神話や歴史を調べているときは、普段よりも暗い炎がよく燃えている。そこによく知らない護衛という人間がいたら、いろいろするとか落ち着かないなんてもんじやない。

幸い、オリバー男爵に半端無く鍛えられ、国内屈指の実力と彼に認められているおかげで、護衛は割と簡単に外せたが。

余計なことをちらほら考えつゝも、引っ張り出してきた本はしつかり最後まで目を通した。

別にポリシーとかいうのではない。

どこまで神話や歴史が正しく事実を伝えているかなど分からぬ。しかし、情報が多いに越したことはない。自分で取捨選択しながらも理解し、把握しきれる限りは、益になることはあっても害になることはない。

読み終えた本を元の棚に戻し、図書館を出ると既に外は暗かつた。図書館に入ったのが午後6時くらいだったから、2時間近くもいたことになるのか。

俺が出た後ろで、閉館のベルが鳴っているのが聞こえた。

さて、今夜は月に一度の、あいつが来る日だな。

屋敷への帰り道を歩きながら、今日がその日であることを思い出す。

あの日から毎月、月に一度だけ、あいつが、セラステイアと名乗る女神が俺の元へやってくる。

目的は……分かりやすく言つならば夜這いだ。

最初は混乱していた中での事だったので、特に疑問も持たずに抱いていたが、どうも、夜這いに来た女神は俺の心をいじくって、無理矢理欲情させてる節がある。

昼間、どうにもイヤなことがあつたりして、到底そんな気分になれないはずだったこともあるのだが、女神に見つめられ、触れられた途端にその気になつたことも一度や二度ではない。

女神のくせに、毎月とは……清楚な外見からは想像も出来ないが、とんだ色魔だなと思ったこともあるし、面と向かって言い放ったこともある。……その後、朝まで徹底的に搾り取られたので、一度と言わないことにしているが。

ちなみに、女神セラステイアは、このセレメンティーノ王国の守護神とされている。もつとも、何故か、国でもなく一部の人間しか知られていないようだが。

そんな女神が俺に構つてくるのは……まあ、聖剣が理由なのだろうが、時折鬱陶しいとと思う反面、便利でもある。

4年前のあの後、両親を殺した疑いは当然、俺にも向けられた。しかし、何故か俺の弁明はあまりにもすんなりと受け入れられ、他の証人に確認したり、現場の検分をしたりすることさえ無かつた。後日考えたのだが、女神が裏で手を回したのだろう。

そう考えれば、毎月夜のお相手をするくらい、命の危険があるわけでも無し、安い代償なのかも知れない。

ジリリリリリリ
.....

閉館のベルが鳴り響く。

もうそんな時間か

を知つた。

とも思ってたより持ってきた神話を読むのに時間がかかるってい
たらしい。読みづらい字が多かったのが原因だろ？ 内容は……い
つも通り外れだつた。

どうせ、この辺の本を読む人間もいないだろうと、用意してはいたが普段は使わない栞を勝手に挟み、本を棚に戻しに行く。

本を借り出せたら楽なのだが、この辺の本は全て持ち出し禁止なので、そもそも行かない。……ついでに一般人立ち入り禁止で、下つ端貴族程度は入れて貰えないような区画だつたりする。公爵である俺には関係ないが。

また明日だな」

るだつたが、さすがに閉館時間は守らなくてはならない。

「Jの図画の入り口は人目に付くないとJNはあるので論かは
出入りするところを目撃されることはまず無いのだが、図書館自体
への出入りはそもそも行かない。あんまり変な時間に出入りしている
のを目撃され、そこからあれこれ噂話がたつたりすると、護衛無し
でやつてくるのが厳しくなるかも知れない。

本を棚に戻し、出口へ向かおうとした俺はふと何かの気配を感じ

た。

込みは禁止されている)、気配の元を探る。

あまりに何も起きないまま図書館に通い続けていて、すっかり油断していたが、誰かにばれれば、例えば身代金目的の誘拐などは十分あり得る。

気配はさつき本を戻した棚の方からしていた。正確には更にその奥の、光が十分届いていないあたりからか。

殺氣や害意の類は感じないが……仕事だと割り切っている暗殺者などには、淡々と仕事をこなすあまり、殺意も害意も無くしてしまった者もいると聞く。油断は出来ない。

もう思う一方で、そこまで行つてしまつている暗殺者の類なら、いつも気配を漏らすことなど無いだらうとも思う。

とりあえず、まず決断しなくてはならないことひとつ。

気配の元を確かめるか。

逃げるか。

どつちの選択肢を選ぶかだ。

……悩むだけ無駄だな。

俺の性格からして、逃げるなどと性に合わない。この程度で逃げていたら、復讐など到底出来はすまい。

そう決め、俺はすり足で、しかし音を立てないように、気配の元へと近づき始める。

もつとも、相手の狙いが俺だというなら、そんな動きもお見通しだろうが、相手の腕次第では、どつちの動きを掴めていない可能性もある。

どつちにしても、わざわざどつちの動きを教えてやる必要など無いのだ。

さつきの棚が見える位置にまで移動し、棚の奥を視認する。

……何もないな?

もつとも、棚の影や通路を曲がつたところに何かいる可能性は高い。気配はしっかりと感じるのだから。

さて、どの棚の通路から奥へと向かうか。

棚が切れてすぐの所に気配の主がいて、襲われました、では洒落にならない。少なくとも剣の間合いよりは距離をとつておくべきだろ、つ。

気配が動かないことを確認しつつ、一度離れた棚の前へと移動し、そこから奥へと潜り込む。ここからなら、棚の間から出ても、気配の主の元まで少し距離があるから不意打ちを食らう心配はだいぶ減るはずだ。

.....?

棚の影からそーっと気配の方を覗いたが……いまいち何も見えない。暗いのは暗いのだが……人影くらいは確認できるだけの明るさはある、はずなのだが？

さて、どうしたものか。

まさか本当に幽霊、の類でもあるまい。もつとも、そうだとしたら今の俺には手に負えない。

そんな風に悩んでいると、

「君を害するつもりはない……」こちらに来たまえ

そんな声をかけられた。

俺以外に誰かいるのか！？と考えても、他に人がいるとも思えない。

そして、改めて気配の方に目をやつて……軽い驚愕に囚われる。いつの間にか気配は人の姿をとつていた。

「ふむ。誰を指名しているのか分かつていないので？」

「あ」に手を当てて、首を捻ったその影は、

「公爵、君のことだ。こちらに来たまえ」

誤解しようもなく指名されてしまった。

「俺に何の用だ？」

無論、呼ばれたからといつてのここの出でいくほどお人好しでもバカでもない。

ただ、武器を構えるのに物陰に隠れている……といつのは些か不便な気がしたので、棚の影から出て、その人影へ向き直りはした。

「くつくつく……」

そんな俺の様子を見て、影は笑った。

ただ、その細部は全く分からぬ。顔も、服も、何もかもだ。

ただ、輪郭だけが見える。

幻のようにしか思えないが……

「幻ではないとも。そして幻だとも。私はここにいるし、しかしここにはいない」

心の中を読まれた……のか、単に狂人の類なのか……。いまいち判断しかねるが……

「そう、心は読めるとも。しかし、私は狂ってはいない。いや、君たちの基準で言うならば狂っているのかも知れないね」

どうやら、油断できない相手のようだ。しかし、心を読まれるとなると……出来れば、

「敵にはしたくないだろう？ それでいい。賢明だ。実に賢明な判断だ。私も君の敵になりに来たのではない。君を害しに来たのではないのだからね」

……信用できそうには全く思えないが、俺に対する害意はないといつのは本当なのだろう。次の瞬間にどうなっているかは知らないが、害意があつたならこんなのんびり話すことなど出来ていらないだろうから。

「それで、お前は何者だ？」

今度は考えをそのまま口に出す。やはり、こちらの考えを読まれながら会話 それが会話かどうか別として するのは気分は良くない。

「ふむ。名前を聞きたいのかね？ それとも私がどういう存在なのかを知りたいのかね？」

意地悪く影が笑つた……ような気がする。

「両方だ」

「はつはつは！ それはまた意味のないことだー名前など他との区別のためについているだけに過ぎない。それを他と区別できるだけの

知識がないなら、その名前だけを知つても何の意味もないと言つのに！」

「つまり、答える気がないと…？」

苛立ちを押さえながら訊くと、

「如何にも如何にも。どうせ、私は神話にも歴史にも名前も存在も記されていない影…。今ここで、君が見ている私が全てで、これから見せる私が全てなのだ！」

いちいち回りくどい勿体ぶつた言い方だが、確かにそれでは名前など聞いたところで意味はない。だが、

「では、もう一度訊く。俺に何の用だ？」

「ふむ。それに対する解答は確かに意味を為す。君に対する私という存在を意義付けるのにもっとも有意義な質問である」

「答える気はあるのか？」

「答えようとも答えるとも、これから君に告げる、教える、君の知らない事実が、その答えとなるだろう」

……どうやら、俺に何か伝えたいことがあるらしい。が、この話し方は何とかならないのか。

そう考えたのが通じたのかどうか、

「君が持つドットマートの聖剣とは何だと想つね？」

！――――――！

「何故、その名を知つていい！？」

「ほほう、やはり気になるか。気にならない方がおかしいか。気になつて当然という訳か」

「お前……何を知つている！？」

剣を抜き、力尽くでもこいつから知つてている全てを聞き出す。拒否など認めない！

「ふむ？ 力尽くといつのは無駄だと思うが……少々気が短すぎはすまいか？ なるほどなるほど、これが呪いといつヤツか」

意味不明なことをぼざこっている影に向かって、一気に距離を詰め

剣を突きつけ……！？

「そのよつななまくらでは私に迫ることなど決して永劫に叶ひ」となく不可能だ。無意味なことは止めたまえ」

なんだこいつはー? ?

気配は壁に映る影そのものだった。剣を突きつけるべき肉体が無い。

「まあ、よい。ダットムートの聖剣を作ったのは何者か。ダットムートの一族を作ったのは何者か。教えてやろつ。

お前の叔父を唆したのは何者か。そいつは今どこにいるのか。教えてやろつ。

そして、ダットムートの聖剣とは結局なんなのか。それもまた教えてやろつ」

田の前でその影が揺らめき、渦巻く。

いつしか影の中には光が生まれ、その光の乱舞を見ていると……

「……………？」

目が覚めて真っ先に視界に飛び込んできたのは、見慣れた自分の寝室の天井だった。

既に外は暗い。窓から入る月の光から判断して、時刻は深夜付近だろう。

「夢か？」

意識が無くなる前の最後の記憶を思い出し、そう自問する。

図書館の一画での影との遭遇……

あまりにも現実感が薄い。

ただ、一方で、自分で寝室に入り、ベッドで横になつた記憶がないのも事実だ。つまり、ベッドに入る前に、非日常的なことが起きたのは間違いない。

そして、その証拠はすぐに見つかった。

「これは……」

ベッドの横の小さな台の上に置かれている一枚のメモ。そこには、こう書かれていた。

『夢ではない

全ては図書館で実際に起きたことだ

そして質問の答えは既に君の頭の中にある

くれぐれも、女神には悟られないようにしたまえ』

メモに書かれていた文字は俺の字ではない。いや、屋敷でこんな

歪んだ字を書く人間を俺は知らない。

ならば、これはあの影が残したメモなのか？

いや、断定するのは早い。

だが、何者かが俺に接触してきたのは事実だらう。それが図書館だつたかどうかは別としても。

図書館でのことが実際に起きた出来事だったのかどうかを考えて

みるが、自分の記憶に自信が持てない上に、証拠が紙切れ一枚では話にならない。

では、メモの他の内容はどうか？

質問の答えが既に俺の頭の中にあると書かれているが……質問？すなわち、ドットムートの聖剣は誰が作ったのか。

そう頭の中に疑問を浮かべた瞬間、

『女神セラステイア』

すっと答えが頭の中に浮かんできた。

一瞬、何が起きたのか把握できずに少し取り乱したが……幸い、屋敷の者達に気づかれるほどではなかった。

「どういうことだ？」

ドットムートの聖剣を作ったのが何者か、その疑問を頭に浮かべた瞬間、女神の名前が頭の中に浮かんできた。

これが、既に答えが頭の中にあるということなのだろうか？

他の質問でも試してみる必要がある。

次は……何故、ドットムートの聖剣が作られたのか？

『他の神々を殺すため』

再び、意図しない言葉が脳裏に浮かんでくる。

では、我が叔父を唆したのは何者か？

『女神レイフル』

それは何者だ？どこにいる？

『それは女神。セラステイアの敵。グランス帝国の守護神。今はグランス帝国の首都にいる』

……初めて聞く名前と今まで知らなかつた情報。

これで、俺自身が勝手に質問の答えを作っている可能性は極めて低くなつた。ならば……

ドットムートの聖剣を作ったのは女神セラステイアということだ！

その瞬間、頭のどこかで何かが壊れる鈍い音がした。

その何かを壊した憎悪が一層激しく燃え上がるうとするのを抑えながら、念のため、確認する。まだ、思考を、理性を手放すのは早

すぎる。

ドットムートー族を作ったのは？

『女神セラステイア』

叔父は何故父を殺した？母を殺した？

『先代、グラスティ公爵は聖剣の試し切りで殺された。その妻はドットムートー族。聖剣に力を与えるための生贊として殺された』

何故、女神セラステイアは止めなかつた？

『元々セラステイアはカルデラを聖剣の生贊とするつもりで、ブルードにそう命じていた。先代のグラスティ公爵の生死には全く関心がなく、むしろお前の憎悪を煽るために助けなかつた』

……そうか。あの女も一枚噛んでいたということか。

憎悪を煽る？

ああ、確かに煽られたさ。未だに憎しみを抱えたままであるほどにな。そして、両親を殺させた、見殺しにした分際で俺のベッドに忍び込んできているその厚顔無恥ぶりは憎んでも憎んでも憎み足りないほどだ！

なら、女神セラステイア。お前も俺の復讐の対象だ。

だが、質問はまだ尽きない。

俺の復讐相手は何者だ！？

『…………』

これには答えは得られなかつた。

意外に役に立たない何かに舌打ちし、壊れたのかと別の質問をぶつけてみる。

神を殺す方法は？

『ドットムートー族の聖剣ならば殺せる。ただし、神を一柱滅すためにはドットムートー族一人分の命が必要だ』

！――！

ちょっと待て。待て。

つまり、復讐を果たすためには、誰かを生贊に捧げなくてはなら

ないということか！？

それに確かにドットムートの一族はもつ……

『現在生きているドットムートの一族はリストヌルとフイリーの一人だけだ』

何がが返してきた答えは、いつか女神セラステイアが言つていたことと全く同じだつた。

復讐の対象は一柱。

つまり、必要な生贊は4人。

今、聖剣に蓄えられている力は……？

『一人分。カルデラの分のみ』

つまり、3人分足りない。

俺の命は別に構わないが、それではセラステイアかレイフェル、いずれかしか殺せない。

復讐を果たすためには、フイリーと、フイリーか俺の子供達までも生贊として殺さなくてはならない。

だが……

この身に滾る憎悪はそれを良しとする。

残る感情を焼き尽くし、全てを捧げて神を殺せと叫んでいる。

全てを捧げてこそ、神に届くと。

その前で、家族への、フイリーに対する思いが必死に抵抗している。

唯一残された血縁。大事な家族。妹。

それを殺すというのか？

出来ない。出来るわけがない。

人としての思いが、家族への愛情が、必死に憎悪に抗おうとする。しかし、憎悪はそんな抵抗を嘲笑うかのように燃え上がり、憎しみ以外の全ての感情を焼き尽くそうと暴れ回る。

ああ、苦しい。あまりにも苦しい。

相反する二つの感情の争いは、延々と続き……

そして、勝ったのは、

いや、出来る。嬉々として殺せ。

そうだ、生贊を揃えろ！

そして神もろとも全て殺せ！

憎悪だった。

2011/9/26 一部表現を修正。

その日から、復讐のための計画を練る日々が始まった。

頭に植え付けられた何かは、主觀が入り得ない明確な質問に対しても、答えを寄越すことが分かつていて。そして、その答えは確認できる限り、間違えていたことはない。

つまり、セラステイアとレイフェルという二柱の女神こそが、復讐すべき対象ということは十分信用できる。……今更違うと言われても、皆殺しにするだけだが。

ただ、頭の中の何かは未来予知の類だけは出来ないようだ。何度か試してみたが、全く答えを得られなかつた。

これが出来れば、復讐も簡単になるのだろうが……できないことは仕方ない。

やるべき事の一つに、生贊とするダントムートの血を引く者を最低、一人は増やすことがある。つまり、俺かフイリーが子をなすまでは、復讐の準備が整うことはない。

まあ、どちらが子をなすにしても、かなりの時間がかかるため、じっくり計画を練る時間はある。

ただ、1つだけ懸念していたことがあつた。毎月やつてくるセラステイアである。

女神と言つからには、俺の心を読み、操ることも出来るはずだ。かといって、今更距離を置こうとすれば怪しまれるだけだ。何より普段の居場所が分からぬから、迂闊に接点を減らすわけにも行かない。

だが、幸い、俺の頭の中の何かには全く気づかれる事もなく、それどころか男に溺れているかのような女神は、俺が何を考えているかすら、気にしていないようだつた。はつきり言つて、無駄な心

配をしていたわけだ。

「とりあえず、カリオス公国にフイリーをやることは出来ないな」夜、マクシミリアンすらもいない執務室で、俺はそう呟いた。フイリーは大事な生贊だ。手元から離すわけには行かない。だが、そろそろ返事を貰いたいと、カリオス公国から手紙が届いている。

無論、国同士の関係に絡むことだ。今後も友好関係を保ちたければ、拒否するという選択肢はない。

「となると……セシルをフイリーとして出すしかないわけだが……」一応、セシルからは、それとなくグラカーデ王子の印象を聞き出している。

『素敵な人でした。気遣いも上手でしたし、お話も楽しくて』

と、頬をほんのり赤く染めながら話していたので、好意は持つているだろう。

つまり、セシルにカリオス公国へ嫁いでくれと言えば、本人は必ずしも嫌がるまい。

「それでも、セシルをセシルとして嫁がせるか、フイリーとして嫁がせるかで話が変わってくるな」

正直、相手は一国の王子だ。セシルとでは身分差がありすぎる。かといって、正直にあればフイリーではなかつたのだと言つのも問題だ。

我が公爵家中だけであれば兎に角、世間一般では平民は王族と口をきくことすら許されない。事実を教えよつものなら、いろいろと問題が起きるのは目に見えている。

一方で、これは好機もある。

フイリーはれつきとした王族の血を引く公爵家令嬢なのだ。放つておけば、数年のうちにあちこちから婚姻の申し込みが舞い込んでくるのは確実だ。

だが、セシルをフイリーと偽つて送り出してしまえば、後に残るのは対外的には平民の娘ただ一人。妻に迎えたいなどという醉狂な人物は現れまい。

そう考えた時点で、どうするかは決まった。

フイリーとセシルの名前と身分を入れ替え、セシルをフイリーとしてカリオス公国に嫁がせる。フイリーはセシルとして手元に残すこととする。

セシルにもフイリーにも元の名前を捨てて貰うことになるが、そこには目を瞑ることにした。

「フイリー、セシル。話があるから、執務室にまで来てくれ」
そう、二人を呼び出したのは翌日の朝食の席でのことだった。

「お兄様、お話つて何でしようか？」
机の前に立つたフイリーがそう訊いてくる。

美人にはなりつつあるが、どちらかというと可愛いという言葉の方がしつくり来るような、まだまだ子供っぽいフイリー。

隣に並んでいるセシルも似たようなもので……グラカード王子とやらは、ひょっとしなくてもロリコンか？とか、思わないでもない。

いや、そんなことを考えるために一人を呼んだのではなく。

「コホン」

自分の雑念を追い払うべく咳払いを一つしてから、用件を話し始める。

「先日、フイリーが体調を崩して代わりにセシルが舞踏会に出たことがあった。二人とも、覚えているな？」

「ああ、セシルがどこかの王子様と楽しく話して帰ってきた時です

ね」

「フイリーの言葉で、俯きながらもじもじと赤くなるセシル。

……これは、脈有り確定だな。

などと考えながら、俺は頷いた。

「話というのはその王子様の事だ。彼はグラカーデ・エム・カリオス。カリオス公国の王子だ。それも王位継承権第一のな」

その説明に、フイリーは感心したような顔になり、その隣のセシルは呆然とした顔になつた。

それには構わず、話を続ける。

「実はあの後、そのグラカーデ王子から手紙を頂いている。内容は

……」

少しセシルをいじめてみようかと思つたが、どうもショックを受けている様子だし、止めることにする。この後、いろいろショックを受けて貰うことになるのだ。ショックを受けすぎて途中で理解力を手放して貰つて後から説明もう一回、というのは手間だ。

「フイリーを妻に迎えたいというのだ。どうやら、舞踏会で一緒に話をしたフイリーのことが余程気に入つたらしいな

特に「一緒に話をした」という所を強調しながら、二人に、とうより主にセシルに告げる。

「あ、いえ、その……」

見ていると真っ赤になつたり、真っ青になつたり、なにやら一人百面相でもしているのか、セシルの顔が大変なことになつていて。その隣のフイリーは、どういう事になつていてか気づいたらしく、セシルの様子に気づくこともなく難しい顔になつていた。

「お兄様はどうするべきだとお考えなのですか？」

しばらくして口を開いたフイリーは、俺にそう訊いてきた。

だが、その目は既に何か察した様子だ。

いや、覚悟したのかも知れない。どつちの選択肢をとつても、フイリーもセシルも、諸手を上げて喜べるようなことはならないのだから。

俺はフィリーと、少し落ち着きを取り戻したセシルの顔を交互に見やり、

「セシルにはフィリーとして、カリオス公国に行つて貰おつと思つてゐる」

ますます難しくなるフィリーの顔。セシルの方は、一瞬何を言われたのか理解できなかつたようだが、

「え……」

大声を出しかけて、フィリーがとつさにその口を塞いだ。

「つまり、私とセシルに入れ替わるというわけですね？」

もがもがともがくセシルを押さえつけながら、確認するように問うてくるフィリー。

「ああ、そうだ」

動搖することもなく頷いた俺の様子に、フィリーは何か感じ取つたのだろうか。

「つまり、私は今日から一生、セシルになるのですね？」

「ああ、そうだ」

もう、俺の精神はこの程度のことでは揺るがない。揺るがさない。例え、妹の目に何かを耐えるような色が混じつていたとしても、だ。

その妹の目を見据え、次にセシルの目を見据え、

「そして、セシル。お前は今日からフィリーだ。フィリー・フォン・グラステイだ。一度とセシルに戻ることはない」

そう、強く命じる。

もう、セシルも暴れてはいなかつた。理由を訊きたがつてゐる様子だったので、それは後からフィリーに……いや、セシルに説明して貰えと告げる。

「俺はこのまま部屋を出る。お前達は互いの服を交換してから出でくるがいい」

それだけ言い残すと、俺は執務室を出た。

そのまま、軍の訓練のために屋敷の玄関に向かおうとして、一度

だけ振り向いて執務室の扉を見つめる。

フィリーとセシル、次に一人が出てくるときには、一人は服だけ
でなく、その名前も何もかも入れ替わっているのだ。

『婚姻の申し込みを受ける』

そう、カリオス公国に返答してからは、嵐のような日々だった。あちらから山のようにいろいろな物が贈られてきた。

中立国で戦争に巻き込まれることが少ないという平和な土地柄、この世界での貿易の中心地として、或いは様々な技術・芸術の発達した国として、原則常に戦争状態にあるセレメンティー王国に比べ、遙かに珍しい物や貴重な物、便利な物などが沢山ある。

そういう品々が、未来の王妃の生家であるグラスティ公爵家にこそつて贈つてこられたのだ。

部屋が2つ3つ、それらの品々だけで埋まりそうになり、これ以上送つてくれるなどあちらに注文をつける羽田になつた。

次に、フイリーの教育である。あちらとこちらでは使つてている言葉は似通つてゐるもの、やはり全く同じとは行かない。更に、未来の王妃としてあちらに行くならば、最低限の礼儀作法に知識も身につけさせなくてはならない。

幸い、グラスティ公爵家令嬢として恥ずかしくない程度の教養と礼儀作法は十分に叩き込まれていた。それを下地にすることで、カリオス公国からフイリーの教師としてやつて來たどこの貴族の令嬢は、一月ほどでフイリーをカリオス公国の社交界に出しても恥ずかしくないレベルにまで仕上げたとか。

……相当大変だったようだが、女性達のマナー教室を覗く勇気はなかつたので、何が起きていたのか、俺は知らない。何度かお茶やケーキを差し入れに行つたマクシミリアンですら弱つていたので、出来れば知りたくない。

最後が求婚してきたグラカード・エム・カリオス王子当人の頻繁な来訪である。途中からは一日おきのペースで顔を出していたし、あれは絶対国に帰つてないと断言できる。

一度こつそり、彼の付き人の一人を捕まえて、王子があんなんでいいのかと訊いてみたのだが、今まで浮いた噂の1つもなく、このままでは生涯独身かと懸念されていたそうで、むしろ国王含めて周囲からしつかりやつてこいと尻を叩かれてきているとか。

一応、この国は常に戦争中で、一度は王都近くまで敵軍に侵入を許すとか安全とは言い難いんだが……

いや、他国の王族の家庭事情など知らない方がいい。そうに違いない。

ただ、かの王子が毎日のようにグラステイ邸に顔を出し、その度に王子とフイリーのバカツプルぶりに、屋敷中の人の仕事が中断を余儀なくされるのはさすがに困った。

結局、グラカード王子は我が屋敷には出入り禁止……には出来なかつたので、フイリーを王城に連泊させることで、王子がやってこないようになつた。

ちなみに、ここ数年大人しくしていたお隣のグラントス皇国だが、最近、再び国境線の付近で我が国と小競り合いを起こしているらしい。情報部によると、近々大規模な軍事行動に出る可能性があるとのことなので、王子を追い払つた後はかなりの時間を軍の鍛錬に費やす羽目になつた。

明日はフイリーと共にカリオス公国へ向かう晚のこと。
「何を考えているのですか？」

月に一度訪れてくる女神が、俺の隣でそう訊いてきた。
事を終え、互いの肌が上気しているベッドの上のことだ。

正直、俺の復讐の対象に、セラステイアの名前が入ったことを知られるのではないかと、かなり警戒していた。しかし、杞憂だったようだ。

いつものように俺を誘い、自らの情欲に身を任せることの女神は何も気づいた様子はなかつた。

「ちょっと明日のことを、ね」

セラステイアのブロンドの髪に手櫛を入れながら、内心の憎悪などを素知らぬ顔で答えてやる。

「ああ、フィリーのことですね」

枕に顔を埋めたまま、セラステイアはそう言つた。

そう言えば、フィリーのことも心配の種ではあった。隣国に嫁がせるのは、女神としてはアリなのだろうかと思っていたのだ。

実際には、何の反対もされなかつた。むしろ、諸手を上げて喜ばれたくらいだ。

理由は分からない。分からないが、どうせ口クでもないことを考えているに違ひなかつた。

もつとも、入れ替わりにすら気づいていない様子では、その口クでもない期待は大いに裏切られるだろうが。

「やはり、大事な妹を遠くにやるのは心配なのですか？」

「言つまでもないだろ？ たつた一人の肉親なんだから

「そうですね。でも、きっと大丈夫です。あの国は平和なのですか

「う

「身体」と俺の方に向き直り、妖艶な笑みを浮かべる女神。

「守つて上げるとは言つてくれないんだね」

「残念ながら……あの国は私の力が及ばないところですから」

「猿芝居を。と思わないでもないが、確かにあの国は別の神の民の

国だ。本当に力が及ばないのかも知れない。

まあ、それならそれで好都合ではある。

などと考えていると、

「それよりも、貴方もそろそろ妻を捜すべき時です

「……毎月通つてきていてよく言ひ」

あまりに呆れすぎて、うつかり心の中の蓋が取れそうになつた。慌てて蓋を押しつけて、ついでに何か気の利いたことでも言つてみようかと思つたが、

「そうですね。できれば、貴方には私だけを見ていて欲しいです」ふざけたことを抜かしてくれたので、止めにした。

「ただ、私は貴方の子を産むことは出来ません。それでも……」

そう言いながら、女神は手を伸ばしてくる。

「せめて、この一時だけは貴方の物に……」

そういうことか。

セラステイアが何を求めているか知つた俺は、あまり気は乗らなかつたが、付き合つことにした。

いつも通り……というのは難しいが、快樂に溺れている間は、こちらがボロを出しても氣づかないだろう。なら、それで時間を潰すのもありだらうからだ。

その翌朝。

俺が起きると、既に女神の姿はなかつた。いつものことだが。

既に昨日のうちに、カリオス公国へ向かうための支度はほとんど全て済んでいる。

予定では、往復におよそ一週間。あちらでの滞在も一週間なので、大体一月ほどの予定になつていた。

「カリオス公国ってどんなところなんですか?」

のんびりと揺れている馬車の中で、向かいの席に座っているセシルがそう訊いてきた。

國の外に出るのは初めてということで、かなり浮かれている。

ただ、俺もセレメンティーから出るのは初めてで、勿論カリオス公國も行った事なんて無い。だから、本で読んだ知識の披露で我慢して貰うことにする。

「中立国ということで、長い平和を享受している珍しい国だ。偶に周辺國家の争いに巻き込まれることもあるようだが、原則専守防衛。自ら他国を攻撃したことは、もつ数百年以上もないな。攻められたことも百年以上無いという話だ。」

おかげで、ずいぶん人口も多い。セレメンティーの3倍以上はあるな」

などなどと、我ながら呑気な解説を延々と続ける。

まあ、戦争をしに行くわけでも無し、大した悪事を企みに行くわけでも無し。のんびり出来るのは悪くはない。

馬車の窓から見える外の風景は、国境を越えたばかりのこの辺りでは、セレメンティーと大して代わり映えしない。何にもない草原がどこまでも広がっている中に、たまに、遊牧の民が羊や牛を追つていいくのが見える程度だ。

ちなみにセシルも俺の専属メイド扱いでしつかり付いてきている。ただ、フイリーと区別が付かないほどのそっくりさんがグラスティ公爵家にいることを知っているのは、公爵家内部と、先代のグラスティ公と親交が深かった一部の国内の貴族に限られる。

なので、セシルには髪の毛の色を染めて貰ったり、つけ眉毛とつ

け黒子で顔の印象を変えて貰つたりと、変装に余念がない。おかげで少なくとも、ぱつと見た感じ、フィリーと見間違つようなことはなくなつたが……

一月の間変装し続けなくてはならないのに、変装を誰かに手伝わせるわけにも行かず、セシルを変装させるためのあれこれは全て俺の担当になつてしまつた。

「あつちばどうしてるんじょうね？」

解説するネタもなくなり、会話が途切れてしまつし。

セシルが言つたあつちばとは、グラカーデ王子とフィリーの乗つた馬車の方だつ。

本来ならグラカーデ王子は一足先にカリオス公国に帰つてはいるはずだつたのだが、ずるずるとセレメンティイーに滞在し続け、結局、フィリーの花嫁行列と一緒に帰国することになつてしまつていた。で、本来、フィリーは俺たちと同じ馬車に乗つてカリオス公国へ向かう予定だつたのだが、グラカーデ王子の強い要望（といつより我が儘）でフィリーはグラカーデ王子の馬車に同乗することになつてしまつた。

「ラブラブにちやにちやしてるんじやないか？」

些か投げやりに答えてみる。

正直、可愛がつていた妹が、他の男とちやにちやするなど、面白くない。實に面白くない。

「でも、恋愛結婚なんて、貴族や王族では珍しいんじょひつちよつと羨ましいです」

夢見る乙女のよつよな瞳をきらきらと輝かせるセシル。

「まあ、大抵は政略結婚になるからな。跡継ぎだけ出来たら、お互い後は愛人でも囲つて好き勝手やる貴族も多いらしいな」

「殿下、それはあまりにも夢がないですよ……」

俺の意地悪に、پーっと頬を膨らませるセシルだが、怖いというよりひたすら可愛らしい。

それだけに、今夜のことを考えると少しだけだが、心が痛む。

「まあ、フィリーの所は大丈夫だろ。グラカード王子が浮気性でもない限りな」

「浮気性なんですか?」

「いや。むしろ今まで異性に全く興味を示さなかつたと聞いているな。……勿論、同性にもだぞ?」

一瞬、セシルが腐つた目をしたような気がしたので、慌てて補足を入れておく。

最近、どこからか怪しい知識を仕入れているようだが、しつぽを掴めていないので、問い合わせには至っていない。といふか、うちのメイド連中が絡んでる気がしてならない。

まあ、害がない間は放つておくつもりだが……

「でも、フィリーが子供を産んだら、殿下もおじさんなんですね」

「…………」

一気に気分が老け込むようなことを言われた気がする。

「すぐに子供が出来るようなことはならないと思つが……?」

「そんなの分かりませんよ? だって……」

更に何か言ひそうだったが、セシルの口を無理矢理塞いでそれ以上話せなくする。どうにも、この話題を続けると、いろいろと疲れそうな気がするし。

「この話題はもう終わりだ。いいな?」

セシルが頷くのを確認してから、セシルの口から手を離す。

その後は、その夜泊まる宿場町に着くまで、比較的無難な話をしていた。

湯浴みも夕食も終わり、借り切った宿の各々の寝室に皆が戻った後。

俺たちが泊まることにしていた宿は貴族でも泊まれるようなかなりしっかりした作りとなっていた。三階建ての最上階は他の階よりも広々とした部屋（実際にはいくつかの小部屋に仕切られている）が4つあるだけで、グラカード王子、フイリー、俺がそれぞれ一部屋ずつ占有し、残りの一部屋には俺たちの付き人の女官達がまとめて放り込まれている。

「えっと、私はここでいいんですか？」

ソファの上でワインをちびちびやっている俺の前には、ワインの瓶とグラスが載っているテーブルを挟んでセシルが座っている。「この広い部屋に一人というのもな」

無論、それはセシルをこの部屋に呼び出した理由ではない。

「でも、グラカード殿下もフィリーも一人ではありませんか？」

「あの二人は、それぞれ最低限の付き人が一緒に……いないかもしれないな」

俺の台詞に、「ああ」と納得しかけたセシルは、言葉の後半に首をかしげた。

「付き人がいないって、追い出すって事ですか？」

「若い一人が、夜を一緒に過ごしたがるのは不思議なことでもないだろう」

複雑な気持ちにはなるけどな、と心の中で付け加える。

とりあえず、俺のその言葉でセシルはどういう事が察したらしく、顔が真っ赤になってしまった。

「ちょっと、フィリーには早くないですか？」

「貴族なんてそんなもんだ。子供を産める身体になつてないならさすがに止めるがな」

一応、メイド達の噂話で、フィリーも既に子供を産めるようになつている事は聞いている。あまり知りたいことでもなかつた気もあるが。

ちなみに、

「セシルももう、子供を産める身体になつてゐるのも知つてゐるぞ？」
「フイリーの話だけでも真つ赤になつていたセシルをからかうように、
そう言葉をかけると、

「……………！」

ますます真つ赤になつて、ソファの上に置かれていたクッショון
を俺の方へと投げてきた。

さすがにまともに食らうと、持つていたワインが零れかねないので、空いていた右手で投げつけられたクッショൺを受け止める。

まあ、そろそろ頃合いか。

しばし、他愛もない話をしたりして時間を潰した後、ふとそう考
えた。

三階の廊下には警備の者はいない。一階から三階に上がる階段の
下に配置している。女官達も部屋から出歩かないようにしつかり言
い含めてある。理由は、グラカーデ王子とフイリーの邪魔になるか
らとつけておいた。

まあ、個室のドアは防音もしつかりしているし、多少の音は廊下
に漏れたりしないはずだが。

俺はグラスに残っていたワインを一気に流し込むと、グラスをテ
ーブルの上に戻した。

「そろそろ、お休みに？」

「ああ、セシルも寝室に戻るといい」

この三階の部屋は従者付きの身分の人間が泊まること前提の部屋
だけあって、主人用の寝室の他に、従者用の寝室もしつかり備え付
けられている。

「わかりました。それでは失礼させて頂きます」

そう挨拶をして、割り当てられた寝室へ戻るセシル。

俺もソファから立ち上ると、自分の寝室……ではなく、セシル
の後についてセシルの寝室へと入り込んだ。

「……………？」

何故か自分の後に付いてきた俺を見て、首をかしげるセシル。

「いや、間違えてはいない」

俺はそつ答えると、セシルの両腕を掴み、一気にベッドへと押し倒した。

「…………」「

何が起きたのか理解できないセシル。

その唇を容赦なく吸われ、瞬く間に真っ赤になる。

「…………はあ…………何を！？」「

唇を解放され、そう訊いてきたセシルの乳房を揉みしだぐ。「きやつ！？」「

可愛らしく声を上げるセシルに、

「分かるだろ？今からお前を抱くんだよ」

事実だけをそつ告げながらも、俺の手はセシルの胸を揉むことを止めはしない。

「あつ…………はあ…………そんな…………ダメ…………です」

俺の身体を押しのけようとすると、とても本気とは思えないような抵抗では、意味がない。

だが、

「ダメ…………です…………お兄様…………！」

セシルは…………いや、セシルになつたフィリーは、そつ俺を拒絶しよつとしていた。

その様子に、全く心が痛まなかつたと言えば嘘になる。だが、これは必要なことなのだ。

「ダメなのか？フィリー

微かな痛みを押しつぶし、耳元でそつとしゃべく。

「あつ…………」「

本当の名前を呼ばれ、フィリーの両腕から力が抜けた。

「何で…………その名前で呼ぶんですか…………」「

そう、両の目に涙を浮かばせるフィリー。

その涙をそつと吸い取り…………抵抗を失つたフィリーの身体に、俺は没頭していく。

カリオス公国首都、ローレル。

近隣地域最大の都市であり、人口は優に30万を超えると言われる。中立国という立場故の貿易の一大中継地であり、文明の交差路であり、全ての最新技術が集う場所もある。

その巨大都市に到着したのは、セレメンティーを出てから8日目の事だった。

ローレルに滞在している間、宿泊することになるセレメンティーの駐カリオス公館。俺たちが滞在している間、ここにいた大使達には申し訳ないが、彼らにはホテルに移つて貰うことになつていた。まあ、平たく言えば、追い出したわけだが。

その公館の玄関ホール。

「それでは、別荘の件はお任せ下さい」

セレメンティーとカリオスの国境付近で、別荘として使えそうな建物を確保するように命じられたマクシミリアンは、ここから別行動になる。もつとも、別荘が確保でき次第、合流する予定だが。

「別荘って何に使うんですか？」

従者達が馬車からせつせつせつせと荷物を運び出して、俺やセシルが使う予定の部屋にその荷物を運び込んでいる。それを横目に、マクシミリアンに俺が出した指示を聞きつけ、セシルが訊いてきた。

「別荘は別荘だ。俺はあまり使わないかも知れないがな。ただ、セレメンティーではゆつくり出来ないときに使うつもりだ」

嘘と本当のことを半分くらいずつ織り交ぜて答える。

ちなみに、あれから毎晩のようにセシルを抱いているが、何故か俺に対する態度は変わらない。逆に、前よりも微妙に懐かれている気がする。

かなり酷いことをしているはずなので、その逆になることを覚悟していたのだが……実の妹ながら、何を考へているのかよく分からぬ。

ただ、その心の内まで考え出すと、いろいろきつこいことになりそうなので、今後のこともあるし、出来る限り知らない振りを決め込むことにした。

まあ、人間として最低な気はするが、もつこれ以上墮ちようが……あるかも知れないな。

「その別荘、私も行けますか?」

微妙に上目遣いで訊いてくるセシルに、

「もちろんだ」

「これは悩む」となく即答できる。後ろめたい」とはたっぷりあるが。

「なら、嬉しいです。いいところが見つかるといいですね」草原の花のような笑顔で、楽しみですと付け加えるセシル。

確かに、いいところが見つかるといいと思つ。そのために、他の用事が沢山ありそうなマクシミリアンに無理を言って任せたのだが。「いいところを見つけてきたら、マクシミリアンには何か褒美を取らせないといけないな

「是非ともそうして上げて下さいね」

「それはさておき、長旅で疲れただろう。食堂でお茶でも飲まないか?」

部屋でゆっくり休め……と言いたかったが、まだ馬車から降ろした荷物の運び込みとか開梱、整理が終わっていない。従者達がそれらの作業を終えるまでは、部屋に行つても従者達がばたばたして落ち着けないのは目に見えていた。

「殿下が淹れてくれますか?」

「あー、味は保証できないぞ?」

「構いませんよ」

……懐かれてるとでも思わないと、怖くてかなわないんだが、懐かれていても正直ちょっと困る。今夜から、少しいじめ気味に攻めてみるか？

それはさておき。

あまり上手とは言えない手並みながらも、何とか一人分のお茶を入れ、食堂でまつたりとくつろぐ。

「フィリーはどうしてるんでしょうね？」

「王宮で俺たちと似たようなことしてるんじやないか？こっちの貴族連中に捕まつてなければな」

グラカード王子は当然として、フィリーも婚約者破棄はあり得ないものとして、「こちらの公邸ではなく、ローレルに到着するとまっすぐに王宮へと荷物ごと傾れ込んでいった。

無論、グラカード王子の強い要望もあつたのは間違いないが、おかげでフィリーはこっちにはいない。王宮では貴族連中の挨拶責めにあつたりして、当分、俺たちとは顔を合わせないかも知れないな。

「なんか、大変そう……ですね」

貴族連中に捕まつたフィリーを想像したのか、乾いた笑いを浮かべるセシル。

「まあ、実際にはグラカード王子がかばうだろう。警備の問題もあるから、無闇と人を近づけないかも知れないな」

「警備ですか？」

「ここの国は周辺各国と交流があるからな。当然、グラントス皇国出身の連中もいるわけだ」

「それってつまり……」

あまりよろしくない想像をしたのか、不安げになるセシル。

「フィリーの命を狙う連中が出るかも知れないって事だが……一応、カリオス国内では他国人同士の争いは禁じられているし、何かしで

かしたら出身国も含めた厳しい制裁処置が発動される。監視なども付くことがあるしな。大丈夫だろ？」

実際には、俺たちに出来ることは何もない とこつのが正しいところだが、曲がりなりにも次期王妃だ。カリオス公国がしつかり守ってくれるだろ。

そんな他力本願な俺の心中など、セシルは気づいた様子もない。安心したように息をつくと、

「そう言えば、町の様子とか身に出られるんでしょうか？」

と、今度はそわそわし始めた。

……確かに、隣国とはいえた他の国に来る機会などわざわざあるものではない。まして、貴族やそれに連なる者となると、戦争の準備だの暗殺対策だの、言わずもがなである。

なので、セシルの気持ちも分かるのだが……警備の問題もある。気軽に抜け出せるようなものではない。

「公国の中少し確認してみないと何とも言えないな。時期が時期だけに、殺氣立つて連中もいるだろ？」

俺の何とも言えない返答に、セシルが明らかに落ち込んだ。

まあ、一度か二度くらいは何とかなると思つたが、ぬか喜びさせても悪いし、目処が立つてから教えるか。

俺としても公邸に引きこもるにしろ、王宮で貴族相手にするにしろ、どこかで気分転換が必要だ。セシルと一緒に町中をふらふらするのも悪くはない。

「ううしゃーううしゃーー今ならグラカード殿下婚約記念で全品1割引だよー！」

と大声を張り上げて客を呼んでいるのがいるかと思えば、『殿下結婚記念アクセサリ、期間限定発売中ー』

という看板が立つていたり、

『肌にいい野菜を食べて、玉の輿を狙おうー』

とでかでかと書かれた垂れ幕が下がつていたり……

「なんか、すごいですね」

とは、ローレルの商店街を歩いているセシルの言。今は庶民的な服に身を包んでいて、間違えても貴族やそのお供には見えない。

現在、カリオス公国の首都ローレルは、グラカード王子の婚約発表に沸いており、どこもかしこも大騒ぎだ。ついでに御利益にあやかろうというのか、便乗商法も大流行で、市場や商店街はもうそれ一色となっていた。

ちなみに、婚約記念と結婚記念が入り乱れているが……婚約発表が数日前で、来週には結婚するのだから、どっちが正しいのか誰も気にしていない。

「お祭り騒ぎつていうのはこいつこいつのを言つんだらうな
セシルに相づちを打つた俺も、庶民っぽい服を着て歩いている。

公邸や王宮にばかりいるのは息が詰まると無理を言つたといふ、公邸の出入りと服装だけ気をつけねば、出歩く許可が貰えた。で、さつそく庶民向けの服を用意させ、公邸の裏口から日雇いの使用人っぽく出てきて、町を彷徨く今に至る。

「聖堂も何か浮ついてましたしね」

ここに来る前に寄つてきた聖堂も、王子の婚約・結婚といつめで
たい話に結婚願望を刺激された独身男性・女性で大賑わいだつた。
もつとも、どこの神に願いを捧げるのかさっぱりだが……守護神が
いないせいか、カリオス公国の国民はその手のことには無頓着らしい。

ちなみに、

「セシルも何か願つていたみたいだけど、何を願つてきたんだ？」
聖堂で大騒ぎしていた独身女性の群れに突入していたセシル（よ
く潰されなかつたものだ）を思い出して訊いてみると、
「女の子には女の子の秘密があるんです！」

答えて貰えなかつた。

「それより、あれ！ あのお店に入つてみましょー！」

それどころか、俺をアクセサリーショップへと引きずり込む。

「いらっしゃいませ～」

若い女性店員がにこやかに挨拶していくが、セシルはそれを無視
して、陳列棚へと突撃する。

店に入つた時点で手を離して貰つていた俺は、その後からゆつくりと、店内を観察しながら付いていった。

黒を基調とした店内は、外から思つていたよりは結構広かつた。
建物 자체はローレルの他の建物同様石造りのはずだが、壁に垂らされた黒い布で石の壁は隠されており、冷たい感じはしない。……か
なり暗いが。

手近な陳列棚を覗き込むと、意外と種類が取りそろえられている
ことに俺は驚いた。

セレメンティーではアクセサリは貴族や金持ちなど限られた人間
しか身につけることはない。そのせいか、数少ないアクセサリの店
には代表的なデザインの見本が幾つか並んでいる程度なのだ。

俺たちの今の格好で店員がイヤな顔をしなかつたし、ひょっとしてこれは……と考えていると、

「恋人へのプレゼントですか？」

先ほどの女性店員が陳列棚の前で足を止めていた俺にそう声をかけてきた。

プレゼントと言われ、ちらりとセシルを見る。この店員が言った恋人という言葉が聞こえたのか、横顔がなにやら赤くなっているようだ。

その俺の視線に気づいたのか、店員の笑みが微妙に深くなつた気がする。

……なにやら、入ってはいけない店に入ってしまった気がしてきた。

いつの間にか、店員はセシルを引っ張つてきていて、俺の目の前で陳列棚から取り出したアクセサリを当ててみては、これはいまいちだの、これは可愛いだの、これが似合いそうだの、これで色気がほにやららだの好き勝手言い始めている。で、セシルもまんざらでは無さそうだ。

これは最早……買わないという選択肢が無い気がしてきた。

満面の笑みを浮かべた店員に渡されたイヤリングを手に、上目遣いに見てくるセシル。

その視線の威力は絶大で、一応まだ残つている罪悪感まで刺激されると、逃げ場など最早無い。

「……いくらだ？」

その言葉にセシルは申し訳ないという表情と嬉しいという表情を同時に浮かべるという器用な真似を見せてくれた。その横で、店員がガツツポーズをとつたのはしつかり見てしまつたが。

「あの、ありがとうございました」

店から出て、頭をぺこぺこと下げようとするセシルを止め、

「折角だから、つけてみたりビツだ？」

「あ、はい！」

いわいそと可愛らしさラッピングをあけて、早速耳につけて、

「どうですか？」

金髪を搔き上げ、イヤリングを見せてくる。

「まあ、なんだ。

「……似合つてゐるぞ」

その言葉で素直に喜ぶセシル。

心のどこかがうずいた気がするが、きっと氣のせいだ。

ちなみに、イヤリングは意外と高かった。道理で店員がガツツボーズなんかしたわけだ。他のアクセサリは庶民でも手が届きそうな値段が多かったが、セシルが身につけているイヤリングは庶民には手が出しづらい値段だった。

あまりお金を持ってきていなかつたので、一気に懐が軽くなつてしまつたのは余談か。

「少しお腹が空いたな」

ローレルを東西南北に貫く2本の大通り。その交差する場所にある王立公園を散策している最中に、俺は空腹を覚えた。

首都のど真ん中を占有しているその公園は、生け垣の迷路やら、あちこちからかき集めてきたと思しき花が咲き乱れている花園やら、水鳥の群れが遊ぶ池やら、狙つたように配置されている藤棚やら……ここを設計した人間は、結構いいセンスをしていたのだろう。

「何か食べますか？」

セシルにそう訊かれ、辺りを見回すと、屋台が2つ3つ見える。

「スイーツならありそうだな」

「そうですね」

俺の視線の先を追いかけ、セシルもその屋台を見つけたらしい。

「食事の変わりにはならないだろうが、無いよりはマシか」「運動して腹が減ったわけでもないのに、激甘スイーツは如何なものかと思うが、隣で興味をそそられているセシルのためにも、1つ買ってみるとしよう。

「すうじぐおいしいです！ほんとにもう要らないんですか？」
一口食べて撃沈した。甘すぎる。なんだこれは。空き腹に詰め込む物じゃない。

で、後は全部食べていいとセシルに渡すと、きらきらと皿を輝かせながら熱心に食べ始めた。時々俺の方を見ているが……餌をとられないように警戒している小動物っぽい。

にしても、屋敷のメイド達はしそつちゅう甘いものを食べていたが、女性というものはそんなに甘い物が好きなのか。感心する。

その後、公園を出て改めて昼食をとった後、ローレルの市街地にある遺跡を見たり、いくつかの店を冷やかしたり、大通りの路上でパフォーマンスをしている芸人に小銭を投げたりしている間に、すっかり辺りは暗くなってしまっていた。
その公邸への帰り道。

「今日はとても楽しかったです」

「そうか」

「また、こつして一人で遊びたいですね」

「そうか」

まだまだ遊べそうな程にテンションが高いセシル。

それとは対照的にいろいろ疲れ果てた俺。返事も投げやりだ。楽しかったかどうかと訊かれれば、楽しかったと答えられる。でも、それは俺の心苦しさを増すものでもあった。

莊厳な曲が流れている。

あらゆる神々、そして失われたカリオス公国の神を奉るカリオス公国大聖堂。そこで、グラカーデ王子とフィリーの式は行われていた。

大聖堂にはカリオス公国の貴賓に加え、カリオス公国の友好国の大使や貴族達が多く招待され、参加していた。大聖堂に備え付けられた無数の席は彼らによつてほぼ全て埋められていた。

そんななか、新婦の兄である俺は右の最前列の席で、式の進行を眺めていた。

「新郎よ、汝、フィリー・エム・グラスティを妻として娶り、生涯をかけて愛し、守ることを誓うか？」

神紋が掲げられた台の下、一人一段高い位置に立つてゐる、頭髪が全て真つ白になつてゐる大神官が、白い礼服に身を包んだグラカーデ王子に厳かに訊ね、

「誓います」

その前に跪いてゐるグラカーデ王子が静かに答える。

それを聞いた大神官は満足そうに頷くと、真つ白なレースとフリルまみれのウェディングドレスを纏つたフィリーの方へと向き直る。ヘッドドレスに刺さつてゐる一本の赤い薔薇が人目を引く。

「新婦よ、汝、グラカーデ・エム・カリオスを夫として認め、生涯をかけて愛し、側に立つことを誓うか？」

やはり、大神官の前で跪いてゐるフィリーが静かに答える。

それを聞いた大神官もやはり満足そうに頷くと、

「では、立ちなさい。そして、誓いの口づけを」

それを合図に、二人はそつと立ち上がり、互いに向を合つと、ゆっくりを顔を近づけ、そして目を閉じ、唇を重ねた。

いつの間にか、流れていた曲の音量も下げられ、静かな時間が大聖堂を満たす。

公爵ともあろう者が一人では体裁が整わないと同席を認められたセシルが、隣でハンカチを口元に当てて、涙を流している。

「素敵です……」

そんな言葉が微かに聞こえてきた。感動しているのか。

やがて、二人の唇が離れると、

「ここに新しい夫婦が誕生した。願わくば、神々の祝福がこの二人にあらんことを。永久の絆で結ばれんことを」

大神官がそう宣言し、大聖堂の各所に用意されていた仕掛けから、大量の紙吹雪が撒き散らされる。

同時に、静かになっていた楽団が再び大音量で祝福の曲を演奏し始め、出席者達から盛大な拍手が送られた。

そんな中、新郎新婦はもう一度キスをすると、新郎が新婦の手を取つてエスコートしながら、バージンロードを出口へと歩いて行った。

「とつても素敵でした……」

夢見る乙女のような 経験はあるが乙女と言つても問題は無いか？ 表情で、セシルはぼーっとしていた。

「そうだな」

俺にとつては、結婚式が良かつた悪かつたよりも、これで一つ、肩の荷が下りたことの方が大きかつた。気のせいかも知れないが、せめてそう思いたい。

「私もいつか……」

途中で言葉を切つたセシルを見ると、

「あ、いえ、何でもありません」

慌てて首を振つたが、セシルにもこういう結婚式という物への憧れがあるのだろう。ただ、好きな男が出来ても、フイリーになつた

セシルと違つて、セシルになつたフイリーを手放す気はないし、そんな俺にどうこう言つう資格もない。せめて、気づかない振りをするしかなかつた。

大聖堂を出ると、一度公邸に戻つた後、王宮へと向かう。この後、王宮の大広間で盛大な披露宴が行われる予定になつており、新婦の兄としてのちょっととしたスピーチを行うことになつてゐる。

「そう言つわけで、明日はもう来ないから」

大広間の上座に設けられた新郎新婦の席の前に陣取り、フイリーにそう告げる。

「出来れば、帰る前にもお会いしたかったのですけど……」

「そのうち会う機会もあるわ」

意氣消沈するフイリーを、グラカーデ王子が慰める。

「そうですね。戦争が一服している時期なら、何か用事をかこつけて顔を見に来ることも出来るでしょう」

実際、可能ならばそうするつもりではいる。

「その時は精一杯歓迎させて頂きましょー」

「それは楽しみにしていますよ」

にこやかなグラカーデ王子に、こちらも笑顔で返す。

「その時には、甥か姪の顔を拝めるかな？」

「……っ！」

真つ赤になるフイリー。よく見ると、隣のグラカーデ王子も微妙に赤くなつていた。

「まあ、殿下。即位される前にもう一度くらいはこちらにも遊びに来て下さい。ここに比べれば見るべき物は少ないかも知れませんが、それでも改めていろいろ案内させて頂きたいですから」

「ええ。そうですね」

そもそも後ろにすらりと並んでいる貴族連中が鬱陶しくなつてき

た俺は、新郎新婦の前を去るべく、最後の挨拶をした。

「セシルも、また遊びに来てね？」

「ええ、フィリー。あなたもね？」

俺に遠慮して、女性同士の話はあまり出来なかつたものの、せめて最後の挨拶だけはしていた。

「それでは、殿下の健康と幸せをお祈りして」

「こちらこそ」

互いに握手を交わし、俺とセシルは新郎新婦の席を離れた。

無論、その後の新郎新婦は押し寄せてきた貴族達の挨拶に忙殺された。こちらもあちこちの貴族が押し寄せてきて、挙げ句、セシルを息子の妻にとか、私の後妻にとか言い出してくる連中が出始めたので、さつさと見切りをつけて逃げさせて貰つた。

「そんなの聞いていません！！」

珍しいセシルの怒った声が公邸に響き渡つたのは、俺がセレメンティーへ帰る日の朝のことだった。

俺が、セシルはセレメンティーには連れて帰らないと告げたところ、何故か怒りだした。

セシルを連れて帰らない理由は勿論あるのだが……人目があるところでは話せないな。

「じつちへ」

セシルを連れて、この一週間、自分の部屋として使つていた部屋に入る。その際、人払いも忘れない。

「どうして私を連れて帰つてくれないんですか！？」

「一人きりになつて、改めて詰め寄つてくるセシル。すごい怒りようだ。

「危険だからだ」

とりあえず、そこから説明を始めるか。

「危険つて……何がですか！？」

「まずは、声を抑えてくれ。人に聞かれるわけにはいかない話だ」説明より前に、人に聞かれないように声を潜めて貰わないといけない。セシルの怒りは収まつたとは言えないようだが、とりあえず、渋々頷いてくれた。

その頭を撫でながら、

「父上と母上が殺された日のことは、どれくらい覚えている？……

フィリーとして」

その言葉で、思つていたより深刻な理由らしいと感じたのか、セシル フィリーの目から怒りの色が急速に消えていった。

「お父様とお母様が叔父様に殺されたことまでしか……」

そう言えば、途中でフイリーは気絶していたような気もする。
「じゃあ、その後のこと話をつか。時間はないから、要点だけを

な」

フイリーが頷くのを見て、俺は説明を始めた。

ブルードは俺たち一人も殺そうとしたこと。
しかし、聖剣によつてそれは防がれたこと。
俺が聖剣でブルードを斬り殺したこと。
そして、女神のこと。

最後に、聖剣が神殺しの武器であること。

俺たちの一族が聖剣に捧げられるべき生贊であることは伏せた。
だが、それでも十分面倒な事態であることはフイリーも理解してくれたらしい。

「だから、私を危険から遠ざけるためにカリオス公国に残していくおつもりなのですね？」

説明を聞いて、しばらくして、フイリーはそう確認してきた。
「そうだ。誰も知らないが、今でも女神は頻繁に屋敷を訪れている。
神殺しの武器と女神。この2つが揃つているような場所がどれだけ危険か……。そんな場所にお前を置いておくわけにはいかない」

危険の意味が多少違つてゐる説明ではあるが、危険であることは変わりない。……一番フイリーにとつて危険なのは、俺かも知れないが。

兎に角、その説明でフイリーは黙り込んだ。
納得してくれたのだといいのだが……しかし、
「やはりダメです。私も一緒に戻ります」
「だから、それはダメだと、危険だと言つていいだろつ?」
「では、お兄様は危険ではないのですか?」
「……俺は自分くらいは守れるくらいは強くなつた」

フイリーの目に宿る強い光に圧され、返答が少し遅れてしまった。

「だとしても、絶対ではないでしょう？それを……私に手も足も出せないところから心配しているとおっしゃるつもりですか？」

「それを言えば、お前と一緒に戻ったときの俺の心配はどうなる？」

「どういう危険があるのかは分かりかねますが、本気で何かしでかすつもりの人間がいるなら、カリオス公国に残つていっても私の身が安全だとは言えません」

それは……否定しない。できない。ただ、それでも少しは安全だと思うのだ。

だが、

「それなら、お兄様の側にいたいのです」

それを言つたら、俺もそうだ。だが……

俺が答えあぐねていると、フィリーは更に追い打ちをかけてきた。
「それに私は……お兄様の妹であると同時に……その……お兄様のモノでもありますから……」

途中から目を逸らし、真っ赤になつてもじもじするフィリーはとてつもなく愛らしかつた。

「というか、イヤじやなかつたのか？あれ。

何がが間違えてる気がして、一瞬呆然とする。

「それとも、もう、私には飽きてしまわれましたか？」

「いやいや、それは何が違う。んだが？」

「そうでないなら、一生お側にいさせて下さい……」

俺の手を両手で柔らかく包んで、うるうると見つめてくるフィリーのお願い。

「……あ、うん、分かつた。……？」

ちよつとした混乱状態にあつた俺は、うつかりフィリーの言葉に頷いてしまつた。

ハツと気がついたときには既に遅い。

フィリーの顔はすっかり明るさを取り戻していく、

「それじゃ、みんなにはそう伝えますね……」

と、セシルの顔に戻つて部屋を出て行つた。

それから、マクシミリアンには用意してもらつた別荘は結局使わないことを告げ、ローレルを後にした。セシルも一緒に帰ると告げたとき、マクシミリアンの表情が明るくなつたような気がしたのは、やはり何か感じていたのだろう。

そして、セレメンティーハへの帰りの旅路は何事もなく、＝ロ＝ナヒヨーとカリオス＝セレメンティーハの国境に辿り着いた。

「何事だ？」

国境を越えようといつて、馬車が止まつた。それもかなり長い時間止まつていて、疑問に思つた俺は窓から顔を出した。

国境を越える際は、通行者の身元の確認や荷物の検査など、幾つもの手続きがあるので、通れるわけではない。

ただし、王族や上級貴族は、予め連絡が入つていてすんなり通れることが普通なので、公爵である俺などが足止めを喰らひるのは、何かあつたとしか考えられない。

「分かりません。何があつたのだと思いますが、訊いてみます」馬車の横にいたマクシミリアンが、乗つていた馬を駆つて検問所へと駆けていく。

「何があつたんでしょう……？」

不安そうなセシル。

だが、俺はもしかしたらとある可能性に思い当たつていた。無論、あまり良くない予想なので、口に出すのは憚られたのだが……すぐに答えを持つてマクシミリアンが帰ってきた。

「どうだつた？」

俺がそう訊く前に、マクシミリアンは馬車の窓に顔を寄せ、小声

で、

「グランス皇国が再び攻めてきたようです。そのため、セレメンティーからの出国者が増えたり、セレメンティーへの入国を躊躇する人間が増えたりして、検問が混み合っているんです」

その返事に、俺は短いため息をついた。予想通りだつたからだ。

「分かった。検問に俺たちを優先的に通すように伝えてくれ。急いで戻らないと行けないと」

「既にそのように伝えてあります。間もなく役人達がやつてくるかと」

さすがに、父の代から我が家に仕えているだけあって、いい仕事をする。

「分かった。では、馬車の誘導などは任せる」

俺はそう告げると、顔を引っ込んだ。何が起きているのかは知つておく必要があるが、細々したことまでやる必要は無い。

「殿下……」

不安そうなセシルの頭を撫で、しばらく待つていると、役人が来たらしい。馬車の外であれこれ話し声がしたかと思うと、すぐに馬車が動き出した。

不平不満の声が聞こえてきたような気もするが、余程酷い侮辱でもない限り、セレメンティーやカリオスでは不平不満を漏らす程度のことは容認される。庶民の不平不満を力で抑え込むのは愚かな行為でしかないからだ。器を小さく見られるというのもある。

ただ、さすがに実力行使で喧嘩を売られると、そうはいかないのだが……幸い、貴族相手に堂々と喧嘩を売るような者はさすがにいなかつたらしい。馬車はすぐに検問所を越えた。

「マクシミリアン」

検問所を十分離れ、街道の人も減つてきることを見越し、俺は窓から顔を出した。

「何でしょう?」

「荷物を積んでいる馬車を後から追いかけさせることにすれば、どうのくらい早く王都に着く？」

俺たちの隊列は、俺とセシルが乗っている馬車を含む数台の馬車と、二十頭以上の馬に乗った護衛達からなっている。当然、それだけあれば足の速い馬車遅い馬車、速い馬と遅い馬、いろいろいる。そして、馬が馬車より遅いのは考えにくいので、隊列の速度は遅い馬車に制限されているはずなのだ。

加えて、俺たちが乗っている馬車は賊に襲われるなどしたときは優先的に逃げる必要があるため、もつとも速度が出せる構造になつていて。ならば、従者や荷物の馬車を置き去りにして、俺たちだけならば、もつとスピードが出せるはずなのだ。

そんな俺の考えを理解したのか、それとも単に主人に質問をするのが不躾だと思ったのか　いや、それはないな　、

「一日近く早く着けるかと」

……どれだけ、他の馬車との性能差があるんだ。自分で利用している馬車とは言え、呆れ返る。というか、それすら知らなかつた俺自身を戒めるべきなのか？

考えが逸れた。

「では、宿に泊まることを止めてしまえば？」

「明日の夕刻には着けるかも知れませんが、馬が持ちません」

馬がへばれば馬車はそれまでだ。さすがにそれは諦めるしかないか。

そう考えていると、マクシミリアンが別の提案をしてきた。

「護衛の馬を取り上げて、今馬車を引いている馬と交代で馬車を引かせれば、少しあはいけるかも知れません」

なるほど。確かに何も引いていない馬なら、あまり疲れは溜まらない。そんな馬を予備に連れて行けば、何とかなるかも知れない。

「それでやってみてくれ」

「かしこまりました」「

俺が顔を引っ込める

「宿は無しですか?」「

戦争が再開されたと聞いて、不安そうなセシルにそう訊かれた。

「ああ。済まないが、湯浴みなども我慢して貰うことになるかも知れないな」

「そうですね。それより、皇国が攻めてきたといふなら、また殿下も戦線へ?」

ちょっとがっかりしたようなセシルに、

「行くこともあるだろうな」「

正直、あまり戦場は好きではないだけに、眉間にしわが寄った。気がする。

「だが、数年前の戦闘で俺が少し暴れすぎたからな。これ以上手柄を立てすぎると、王位継承権の問題に発展しかねないといふ話もある」

「殿下が次の国王に……?」

そういう話を知らなかつたのか、セシルが目を丸くしていた。だが、

「俺としては面倒だから、願い下げなんだがな。兎に角、そういう事情だから、ほんほん前線に送られることは無いだろ?」「

「なら、良いのですけど……?」

ホツとしたようなセシル。さつきから口口口口表情が変わって、実際に忙しそうだ。

その後、何人かの護衛の馬を予備の馬車馬にすることで話がまとまり、俺たちの馬車はスピードを上げ、翌々日の早朝にはセレメンティーの王都に到着していた。

王都に帰り着いた俺は、すぐに王宮に呼び出された。

まあ、戦争絡みの話なのだろう。それ以外に予定より早く帰った俺を急いで呼び出す理由など思いつかない。

そんなことを考えながら、謁見の間に通された俺は、そこで玉座に埋もれ、頃垂れた国王陛下の姿を目にした。

はつきり言って、イヤな予感がする。

……言い直そう。イヤな予感しかしない。

父方の叔父に当たる国王陛下の性格はよく知っている。戦争が始まつた程度で、こんなに打ち拉がれたようになるとは思えない。何事かと訝しんでいると、玉座の右後ろに人影を一つ、見つけた。よく知っている顔だ。

女神、何故そこに立っている？

いや、それ以前に誰も気づいていないのか？

実際、誰も玉座の後ろに立っている女神に気づいた様子はない。あそこまで艶然と微笑んでいる女神が見えているなら、何かしらの反応があつてもおかしくないはずなのだが……

そんな疑問を抱えていると、玉座の下の段に立っていた宰相が、口を開いた。

「グラスティ公。よくぞ参られた。

さて、先日、グラントス皇国が再び戦端を開いたのは既にお聞きになられていると思う。それにあたり、迎撃にアンソニー殿下が当たられた

られた」

アンソニーは現国王の長子であり第一王位継承者である。

「されど……殿下は生きてお帰りになることが叶わなかつた

つまり、死んでしまつたのか。

……死んでしまつた？ アンソニーが？

そこでやつと、状況が飲み込め、そして、宰相の次の言葉が予測できた。既に遅かったのだが。

「リストステル・ドラット・グラスティ公爵殿下。貴方が王位継承権第一位になられました」

宰相の言葉はどこか遠く響いた。

国王の長子であるアンソニーが死に、俺が王位継承権第一位になつてから4ヶ月が過ぎようとしていた。

公爵位は持つたままだったが、次期国王として、父方の叔父である現国王 ブルードの事もあり、叔父という言葉にはあまりいい印象がないな について国王の仕事を学ぶというノルマが発生し、軍務については部下に丸投げの状態が続いていた。

軍と言えば、アンソニーが統括していた軍の代わりに、俺の統括している軍が王子 と言わてもピンとこないが 直属の第二軍として格上げされた。その際、あれこれ揉めたようだが、アンソニーを守りきれなかつた負い目もあり、元第一軍は第三軍に格下げされていた。

「はあ……」

グラスティ公爵邸に帰ってきた俺は、夕食もとらずに自室のソファに倒れ込んだ。

「食事はどうなさいますか？」

俺が脱ぎ捨てたコートを衣装棚に仕舞いながら、メイドが訊いてくる。

「ここで摑る。悪いが出来たら運んできてくれ

かなりマナーが悪いが、食堂まで足を運ぶのも億劫だ。もつとも、週に何度もこんな事をしているせいか、屋敷の使用人たちも最近すっかり慣れてしまった。

しかし、

「そう言えば……」

厨房に向かおうとしていたメイドがドアのところに足を止めた。

「なんだ？」

「セシルが何かお話があると言つてました。呼びますか？」

「何の話だか知らないが、セシルの話となれば、多少疲れていても聞かない選択肢はない。」

「そうしてくれ。……食事もちゃんと持つてきてくれよ？」

「うつかりすると、セシルの話が終わるまで食事が運び込まれないなんて事もありそうだったので、一言付け加えておく。」

「かしこまりました」

「そうお辞儀をしてメイドが部屋を出て行くと、急に部屋が静かになつた。」

窓の外はすでに暗く、魔法の明かりで煌々と照らされている室内から、外の様子をつかがうことは出来ない。

「そろそろ、この屋敷ともお別れか……」

国王陛下の様子を思い出し、ふと呟く。

アンソニーが死んだ後の陛下の落ち込み様はひどかつた。見ていられないほどだった。王妃が生きていればまだ慰め合つことも出来たのだろうが、アンソニーが幼い頃、病氣で亡くなっている。

それでも、何とか義務感からか、宰相の助けを借りながらも国務は何とか遂行していた。だが、それだけだ。

そのせいで、俺が仕事を覚えてきたここ一月ほどは、陛下がこなすべき仕事の大半が俺の方に回されるようになつていて。そのせいか、王宮ではなく陛下が退位されて、俺が王位に就くことになるんじゃないかと噂されている。そう、宰相から直接聞かされた。もつとも、陛下に近いその宰相は、その噂の内容は正しいのだと教えてくれたが。

そんなわけで、陛下の許可を得た宰相は、内々に王位継承の準備を始めている。その準備の目処がつき次第、陛下の退位と俺の即位の日取りが発表されることになつていて。

物思いにふけっていた俺は、扉をノックする音で我に返った。

「入れ」

俺の許可を得て扉を開けたのは、セシルだった。名義上は使用者ながらも、俺の妹扱いされているので、たいてい誰か使用者が一人か二人くらいはついているんだが珍しく今日は一人だつた。

もつとも、俺がセシルを抱いているのはすでに使用者たちにばれている。ばれた時の使用者たちが俺を見る目は氷点下以下だつた。あまりの居心地の悪さに一週間近く、王宮の方で寝泊まりしたくらいだ。

ただ、その間、セシルがあまりに寂しそうにしていたからか、使用者一同からとつとつ戻つてくるように命令されてしまった。その後は、なんだかんだで容認されているようだが、居間でも時々居心地が悪くなるのは気のせいじゃないだろ？

ただ、フイリーにはさすがに内緒にしてもらつていて。マクシミリアンたちも、わざわざ余計なことを教える必要はないと思つていたのか、これはあつさり了承された。

……気をつけないと、グラステイ公爵邸内の力関係がひっくり返りそうで怖い。

「あの、殿下、お時間は大丈夫ですか？」

後ろ手に扉を閉め、おそるおそるセシルが訊いてくる。

「ああ、大丈夫だ」

ソファから体を起こし、セシルにも隣に座るように促す。
「で、話つて？」
隣に座つたセシルにもたれながら、話を促す。

「あ、はい。その……」

なにやら、話しにくい内容なのだろうか。となると、使用者たちは聞かせない方がいいのか？

「そろそろ食事が運ばれてくるはずだ。その後にした方がいいか？」

俺がそう言うと、セシルはどこかほつとしたように、

「あ、そ、そうですね。それでお願いします」

言葉が微妙におかしいが……気にすまい。

そのまま、微妙な沈黙が降りたが、それはすぐに別のノックで破られた。

「今日も仲がよろしいですね？」

なぜか食事を運んできたメイド長のローディが、俺たちの様子を見て、セシルには暖かい視線を、俺には冷たい視線を注いでくる。

「大好きですから」

俺の腕を取つて、ちょっとだけ照れながらセシルが言い切る。それでローディの視線が少し和らいだ。

その間にも、ローディの後ろについてきていたメイドたちが次々と俺の夕食を並べていき、全てを並べ終わると、そそくさと部屋を出て行つた。

……ローディを残して。

「おまえは戻らなくていいのか？」

不思議に思つてそう訊くと、

「もつと大事な話がありますから」

ちらりとセシルに目をやつて、堂々と答えてきた。

俺にはその視線の意味が分からなかつたが、セシルには分かつたらしい。なにやら、赤くなつている。

「セシルの話と関係があるのか？」

何となくそう思つて訊いてみると、

「ええ、その通りです。でも、そのご様子だと、まだ話を聞かれてないようですね？」

「そうだが……」

ローディ、なにやつてんだこの野郎つてな視線はやめてくれ。怖いから。

と思つても、口には出せば。

「話しくそだつたから、食事が運ばれた後でいいと言つたんだ代わりにそう答える。

「そうですか」

結構です。とか聞こえてきそうだったが、ローディからの視線の迫力が緩んだのだし、良しとする。

「セシル様。話しづらいのなら、私の方からお話ししますけど?」
テキパキ派のローディは既にセシルの話とやらの内容を知っているようだ。

「あの、えーと……私からお話しします」

ローディの言葉にちょっと慌てたセシルは、再び赤くなつて、それからキヨロキヨロして、ちょっと俯いたかと思うと、キッと唇を引き締めた表情で俺を見上げて なかなか忙しそうだ 、それから俺の耳元に顔を近づけてきた。

「あの……、……しゃ……した」

何か言われたようだが、はつきり聞き取れない。

「聞こえなかつた。もう一度言つてくれるか?」

俺のその言葉に、顔を離そうとしていたセシルはショックを受けたかのよつに固まるど、もう一度真つ赤になつて、

「……妊娠……しちゃいました……」

えーと。

妊娠ですか。

……妊娠、か。

つまり、子供が出来たと。

その言葉の意味が浸透するにつれ、俺は気分がどん底へ落ちいくのがはつきり分かつた。

横では真つ赤になつたセシルが、それでも嬉しそうに俺の方を見ている。

その頭を優しく撫でながら、俺は考えていた。

ああ、これで全ての駒がそろつた。

セシルから妊娠を告げられたその夜。
俺の寝室にはセラスティアがやつてきていた。無論、その目的など言うまでもない。

出来ることなら、その胸にドットマークを突き立てたいと何度も思つたか分からない。が、まだ準備が整つていない以上、血を吐くような思いで我慢するしかなかつた。

しかし、こいつは本当に女神なんだろうか？
最近、よくそう思う。

俺の上で悶えている様子など、人間の女と何ら変わらない。
人間の心を読めるのかも知れないと思つていたこともあるが、どうもその手の力はないのか、俺が内心で滾らせている憎しみに気づく様子も全くない。

というか、未だにフイリーとセシルの入れ替えにすら気づいてないようでは、かなり疑問ではあるのだが……

「これで、あなたとあなたの子供たちがこの国の主になるわけです
ね」

ひとしきり満足した後、うつ伏せになつて白い背中をさらしたまま、セラスティアはそんなことを言つてきた。

「ああ、セシルが妊娠したことか」

セラスティアが人間の女と違うかも知れない点を挙げるなら、嫉妬の類と無縁ということだろうか。

あるいは嫉妬も普通にすることも知れない。だが、本人曰く、「女神である私は人間であるあなたの子を産むことだけは出来ない」

が、「あなたが死んだ後もあなたの子供たちと一緒にいたい」のだが、それで、そのためには「人間の女に俺の子供を産んでもらわないと困る」のだとか。

なので、俺が他の女を抱いていることを知つても、何も言わないどころか、むしろ早く子供を作るようになつつかれた覚えすらある。相手がセシルというのは、さすがに意表を突かれたようだったが。

にしても、どこでセシルが妊娠したことを聞きつけたのか……。そう思つて訊いてみると、

「ローディと話しましたか？ 彼女とセシルが話しているのを耳にしたのですよ」

とのこと。

ここには普通の人間に認識されずに動き回ることが出来るようなので、それで屋敷の中をうろついて回つて、あれこれ小耳に挟んできているということらしい。

……迂闊なことはしないようにしないと、思いもかけないところからこいつに警戒されるかも知れないな。などと、ふと思つ。「そう言えば……」

ふと、別の疑問もぶつけてみることにした。

事の後のこいつは、かなり口が軽い。今なら嬉々として洗いざらり話してくれるかも知れない。

「アンソニーが死んだことに、絡んでいるのか？」

あの日、カリオス公国から帰ってきた俺が謁見の間で見たこいつの表情が、どうにも気になつていた。良からぬ事をしたんじゃないかという疑いがどうしても消えなかつた。

そしてその答えは、

「そうですね、否定はしません」

あつさりと得られた。

「やっぱ、あなたこそがここの國の王にふさわしいのです。なれば、

そうなるよつにするまでの」と

無邪気なその笑みは、しかしあまりにも不快だった。

たつたそれだけのことのために、自らの民を平氣で死に追いやる
というのか？この女神は。

「それに、私の望みを叶えるためには、デジトムートの騎士である
あなたが王である必要があるのです」

「……望み？」

「はい」

不快感を必死に隠しながら、俺は尋ねる。

「それは、何なんだ？」

しかし、

「それは……まだ教えられません。でも、近いひで教えることがありますよ」

どうせ聞くのも不快な碌でもないことなのだから。だが、その望みとやらは是非とも潰してやりたいし、教えてもらいたいその時とやらを楽しみに待つことにする。

そして、翌朝。

いつものよひで、俺が起きる前に姿を消したセラステイアを捲す
真似もせず、俺は手早く朝の支度を済ませ、王宮へと向かった。

宰相と話をしておいた方がいい。

王位の譲渡が遅れるようだと、あの女神がまた余計なことをする、
そんな気がしていた。

宰相との話し合いは思ったよりすんなり進んだ。

どうやら、俺が思っていたよりも国王陛下の状態は芳しくないらしい。既に女神が余計なことをしているのではないかという疑念に駆られるが、放つておけばもっと事態が悪化する可能性もあった。さすがに、数少ない血縁者だけに、見過ごすのも後味が悪い。

結局のところ、俺にはまだ国務の全てをこなすことは出来ないだろう。しかし、今の陛下でもそれは同じである。ならば、今後さらに容態が悪化しそうな陛下には今のうちに退位していただくのもやむを得ないと宰相は考えていた。

まあ、今の状態の陛下の方が好き勝手出来るとほくそ笑んでいる貴族連中は問題だが……最悪、何とか出来る心当たりもある。毒には何とやらだ。

そして、宰相との話し合いの翌日には、陛下から俺への王位の継承をいつ行うかが正式に発表された。早いほうがいいのは確かだが、儀式にはそれなりの準備が必要ということもあり、一週間後と相成った。

とりあえず、これで女神が陛下に余計な手を出す心配は大きく減った。本当ならば、女神が余計なことをしないように釘を刺しておきたいが、こちらからは連絡もつけられないし、何もしないと信じるほかあるまい。

「と言つわけで、明日からは王宮に移る。こちらに顔を見せる」とはあっても、住むことはなくなるだろくな

大広間に屋敷の使用人たちを集め、一通りの説明を終えた俺は、そう締めくくった。

とはいって、長年住み慣れた屋敷だ。基本的に使用人を解雇するつもりもないし、今のところは屋敷を誰かに譲るつもりもない。……いずれは信用のおける誰かに譲らないといけないが。

とりあえず、明日から首になるわけではないと聞き、安心する使用人たちを眺めながら、その信用のおける誰かを頭の中でリストアップしていく。と言つても、候補なんてほとんどない。

ある程度身分がないと、こんな屋敷は維持できない。一方で、ある程度身分があると既に自前の屋敷を持つているケースがほとんどだ。加えて、この屋敷を大事にしてくれそうだという条件をつけると……

正直、使用人の中にもそこそこの爵位を持つてる人間が何人かいるので、彼らに任せんくらいしか思いつかない。

などと考えていると、

「セシルはどうするおつもりですか？」

筆頭候補のマクシミリアンが、俺と俺の横に立つていてるセシルに交互に目をやりながら、そんなことを聞いてきた。

セシルのことも確かに頭が痛い問題だ。

事情が事情だけに、王妃としても側室としても迎えることが出来ない。おまけに、国王になる俺の寵愛を受けようと群がってくる貴族令嬢たちに何をされるか分からない。

危険から遠ざける意味では、この屋敷に残しておいた方がいいのだが、たぶん本人は嫌がるだろう。というか、既に不安そうな顔で俺を見ているし。

「正直に言えば、王宮に連れて行くと他の貴族どもに何をされるか分からないし、ここに残っていてくれた方が安心できるんだが」

その言葉で、マクシミアンをはじめとする、セシルと親しい使人たちが難しい顔になる。特に爵位持ちの連中は眉間に皺まで寄つている。

「確かに、それは難しいですね……」

「ああ」

マクシミアンの言葉に俺は頷いた。

なんせ、毒やナイフでの暗殺沙汰すら起きたことがあるという。それほどまでに国王の寵愛といつものまゝ、見栄や権力欲にまみれた貴族たちには魅力的なものなのだ。

その点、セシルをこの屋敷に残していくば、それだけでも貴族どものセシルへの関心が削がれる。使用者たちが皆、長年仕えてくれている者たちばかりで、比較的信用がおけるというのもありがたい。

一方で、そうなるとセシルに会うのは難しくなる。時々は屋敷に顔を見せることも出来るだろうが、仕事も生活も全て王宮になってしまつ以上、ほとんど戻つてこれなくなるだろ。

おまけに、時間が空いたからと書いて屋敷にしおりをつ戻つてくるようでは、貴族たちに屋敷に何かありますよと注目されるようなもので……

まあ、セシルの安全を考えるなら、距離を取るしかないのだが……

「セシルはどうしたい？」

考えあぐねて、当の本人の意見を訊いてみる。

「それは……出来れば一緒に王宮に行きたいと……」

親からはぐれた子鹿のよつて、保護者心をくすぐるよつて、じじもじとするセシル。

いや、まあ、それは兎に角、セシルの意見は多分そうだろうと分かっていた。素直に距離をとれるなら、そもそも誰も悩んでいない

わけだ。

「護衛の類をつけようとも、名田がないしな」「いつそのこと、養子にされてしまつてはまだつですか？」

誰かがそんなことを言つてくるが、

「国王の養子となると、継承権が絡んでくる。余計に危険な田に遭いかねない」

とマクシミリアンが一蹴した。

「いつそのこと、俺の両親が養子にしていたとしてしまつのが早い氣もするが……」

「ああ、それは名案かも知れませんね！」

しかし、俺の視線は、セシルのお腹へと注がれた。それだけで、何人かは今の案はダメだと悟る。

「既に殿下の子を身籠もつている。父親不明のままというわけにもいかないだらうし、厳しいな」

マクシミリアンはそう、首を横に振つた。

「いつそのこと、メイドとして同行するといつのばどりじょうへ変なことを言つ出したのはローディだつた。」

「なんか、突拍子もない案のようで、聞きたくないんだが……」

しかし俺は、苦虫をかみつぶしたような顔になつたマクシミリアンを止め、

「続けてくれ」

と先を促した。

「身の回りのお世話をするメイドなら、ずっと一緒にいられます。

もちろん、セシルだけがついていつたら、怪しまれますから、私たちも何人かついていきます。理由は、殿下の身の回りの世話は私たちの方が慣れているし、殿下もその方が気楽だから、とでもすればいいでしょう」

思つていたより、かなりいい案が出てきて、俺はちょっと驚いた。マクシミリアンも驚きを隠せて……いるか。驚いていないとは思いたくない。

「もちろん、セシルのお腹がふくれてきたら、父親が誰かということが騒ぎになりますから、その前にセシルには屋敷に戻つてもらわないといけませんが……」

ローディにつられてセシルを見ると、ローディの案をまじめに検討しているのか、かなり真剣な顔をして、空中を見つめていた。

とりあえず、セシルがどう考えるか。

待つことしばし。

「ローディさんの方針でも構いません」

とのこと。

「ほんとはずっと一緒にいたいんですけど……この子まで巻き込むわけにはいきませんし」

そう言つて、自らのお腹を撫でるセシルの様子に、俺の胸は確かに痛んだ。

「俺としても、それなら言つことはない」

胸の痛みに気づかなかつた振りをして俺は頷くと、「マクシミリアン、ローディ。セシルと一緒に王宮にあがるメンバーの選択は任せる。あと、メイドだけじゃなくて、セシルたちをサポートできるのも何人か決めてくれ」

「はつ」

「分かりました」

ローディの案で不満はなかつたらしくマクシミリアンと、当のローディに後のこと任せ、俺は自室に戻らうとして、

「ああ、セシルも一人と一緒に話しなさい」

と、一緒にこよつとしていたセシルにそう言つた。

これから王宮でセシルをサポートするメンバーを選ぶのに、当人がいなければ話にならない。

「それが終わつたら、何人かこつちに来てくれ。明日以降、王宮に運んでもらう荷物をまとめないといけないからな」

そう言つて、俺はその場を離れた。

王宮に移つてからの毎日は大変だった。

グラスティ公爵邸からマクシミリアンとローディが選んだ使用人たちを引き連れていくのは、王宮の侍従たちと多少の軋轢を生んだが、マクシミリアンとローディの熱心な交渉により、何とか丸く収まつたそうだ。

そつちはそつちで大変だったようだが、俺は俺で大変だった。

國務の間に、王位の繼承式の段取りを叩き込まれ、幾度となく練習させられた。

これで帝国が大人しくしていってくれればまだマシだったのだが、國王が変わるという國の節目は何かとつけ込みやすく見えるものらしい。ちょっとかいを出されて小さい衝突が何度も繰り返された挙げ句、危うく大きな会戦になつてしまつたと、將軍たちがぼやいていた。

そして、今日。

王宮の奥、王族が住まつ区域は朝から大騒ぎである。正直、暗殺者とかに入り込まれたら、お手上げなんじやないかといつくらい。

「わっふ！」

「殿下、じつとしてください！」

「いや、口に入つたぞ？」

「口をぼーっと開けてるのが悪いんです！」

「そもそも、化粧の必要なんて……うわ、待て！やめろ！」

俺は化粧室に拘束され、何人ものメイドたちにぱたぱたぱたぱた化粧を施されていた。

男に化粧はいらない！…と、抗議したのだが、「慣例です」「男

でも白い方がいいときもあるんですね」というメイドたちに、文字通りあつという間に椅子に縛り付けられ（何故かロープまでしつかり用意されていた）、その後は彼女たちのオモチャよろしく今に至る。「こんなものかしら？」「

「ちょっと田元が足りないんじゃない？」

「言われてみればそうかも」

もうそろそろ良さそうな気もするが、メイドたちにはまだ不満が残っているらしく、いちいち俺の顔を覗き込んで、あーでもないこーでもない。

いつ、この拷問は終わるのかと心配になつてると、「時間がなにじこれで我慢しましょう」と誰かが言つて、周りからは不満の声が漏れていた。

仕事をしているときは、時間が足りないと思つていたが、今日ばかりは時間が予定通りに過ぎ去ってくれて助かつた様な気がする。

「では、次はこちらへ」

その声で我に返ると、いつの間にか俺を縛り付けていたロープはほどかれてどこかに片付けられていた。

何故、化粧と着替えがそれぞれ別の部屋なのかよく分からぬが、戴冠式にふさわしい服装に着替えるために、俺はメイドたちに先導されて隣の部屋へと移つた。

衣装室の壁は全面が衣装棚になつていて、そこにはついつい詰め込まれた無数の服は、再びメイドたちの戦争が始まることを予感させた……のだが、戴冠式にふさわしいとされる衣装は慣例で決められていたらしく、既に用意されていたそれに、手早く着替えさせられるだけで済んだ。

「立派ですよ、殿下」

そう言われて、衣装室に備え付けられた巨大な姿見　　要するに鏡を覗き込むと、派手さはないが、威儀は備えている……様な気が

する格好で、俺が立っていた。

「やっぱり、化粧がな……」

どうしても拭えない違和感があるとすれば、結局はそこだらう。

俺がぼやくと、

「何をおっしゃいます。この衣装に合わせるため、唯一そこだけが私たちの腕の振るいどころなのです」

と、着付けさせてくれたメイドの一人が胸を張る。

なんか、違う気がするけどな。

「では、控え室へと案内いたします」

化粧など落としてしまったかつたが、そんなことをすればメイドたちに殺されそうな気がしたので、迎えにきた侍従について、俺は控え室へと向かつた。

「で、そんな格好になつたわけですか」

とは、控え室で俺を待つっていたマクシミリアンの言葉である。

「言つた。好きこのんで化粧などした訳じゃない」

「でも、案外お似合いですよ?」

やはり俺を待つていたセシル（メイド服）がそう言つてくれるが、大した慰めにはならなかつた。

だが、セシルが心にもないことを言つては思わない。となると、男女の感性の違いというやつだらうか？

マクシミリアンに視線をやると、俺と視線があつたマクシミリアンは慌てて視線をそらし、なにやら我慢しているような……

「……笑つたりしてないか？」

「まさか。そんなわけはありません」

問い合わせてみたが、素知らぬ顔をされてしまった。だが、やはり口元のあたりがぴくぴく痙攣してくる気がする。

そんなマクシミリアンを無視することにするといふ

「それより、式の手順の方は大丈夫ですか？」

セシルがそう確認してきた。

「まあ、大したことはないしな。陛下の前に跪いて、王冠を戴くだけだ。後は、即位名を宣言して終了だな」

「国民向けの演説は？」

「一応覚えている。まあ、長々と話す必要もないし、あれくらいはな」

とはいって、最初に宰相が持ってきた原稿は、声を出して読み上げると一時間近くかかりそうな代物だった。長つたらしい演説が嫌いというのもあるが、そもそも覚える自信がなかつたので、即座に書き直させ、最終的には5分もかからない短い演説に直せた。

「じゃあ、後は待つだけですね」

「そうだな」

セシルの言葉に頷くと、

「しかし、まさか国王になることになるなんてな

と、思わずため息が出そうになつた。

「元々、上位の継承権はあつたのです。あらかじめ覚悟なさつておくべきだつたかと」

「さすがに覚悟は出来ているさ。ただ、子供の頃には想像もしてなかつたな」

時々、両親には諭されていたが、俺が国王になるという事は、王子であるアンソニーに何かがあつた時だけだと考えられていたこともあつて、周囲も俺もそのことは意図的に考えないようにしていた節はある。

それきり、控え室での会話は途切れてしまった。
やがて、俺の出番だと侍従が迎えに来る。

「では、行つてらつしゃいませ。殿下」

「ああ、行つてくる」

セシルとマクシミリアンに挨拶を告げ、俺は侍従に連れられ、会

場へと踏み込んだ。

会場は王宮の聖堂だ。

これは、守護神である女神セラステイアの眼前で、その臣をまとめる王は戴冠するべきだという慣例による。ちなみに、既に守護神が失われて久しいカリオス公国では、大広間で戴冠式をやってしまったらしい。

聖堂の入り口から入った俺は、神像の前へと続く通路の両脇に並んだ無数の貴族たちの視線を受け、背筋を伸ばし、堂々と赤いマントを翻らせながら前へと進む。

ちなみに、聖剣は持つてきていない。あれは国王の証でも何でもないし、何より無闇に人目に晒さない方がいい気がした。

俺の入場に時に貴族たちはどよめくこともない。

ただ、俺は静寂に包まれた聖堂の中を、神像の前に立つ陛下の元へと歩き続け、そこで片膝を床につけた。

今日も、陛下は生気がない。

ただ、継承式の日取りが発表されてからは、特に容態が悪化した感じもない。やはり、女神が何かしていたのかも知れないと疑うと同時に、継承式の日取りをはつきりさせておいた甲斐はあったのだと安心もした。

「我、第72代国王フォルトマフ世より、汝、リストル・ドラット・グラスティイ公爵に問う」

厳かな空氣の中、淡々と陛下があらかじめ決められた文言を口にする。

「汝、我らが始祖が造りしこの國を、そして全ての國民を預かる覺悟はあるや否や?」

「あります」

俺もまた、決められたとおりに返事をする。

「汝、我らが神に命を捧げる覺悟はあるや否や?」

「あります」

一瞬、答えを遅らせたくなつたが、意味のないことだと即答する。

「では、汝に命じる。新たなる国王となることを」
陛下は短くそつと、自分の頭から冠を降ろし、その前に跪いていた俺の頭にゆっくりとその冠を載せた。

さすがに居並ぶ貴族たちの間から、どよめきが聞こえてくる。
俺は頭に乗せられた重みを感じながら、ゆっくりと立ち上がり、振り返ると、聖堂を埋め尽くす貴族たちを見回した。
徐々に小さくなるどよめき。

その中で、俺は自身の王としての名前を宣言する。
「我が第73代国王、レイザルス3世だ」

そして、聖堂のじよめきは一気にピークに達した。

國王即位前 4（後書き）

第4章終了です。

即位前と言いつつ、即位しました。

後は伏線なども特に張っていないので、一気に……あと2章くらいかかるかも。

とりあえず、次の投稿はしばらくお休みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4183w/>

ドットムートの騎士

2011年10月9日03時17分発行